

ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程
——経済的福祉とエスニック・アイデンティティの観点から——

青山和佳*

**The Adaptive Process of the Badjaos in Davao City:
Economic Well-Being and Ethnic Identity**

Waka AOYAMA*

The issue of ethnic identity—or more aptly the “cultural well-being” of indigenous peoples—has never been explicitly discussed in development economics. Development economics has as its academic concern the pursuit of economic well-being and is often unconcerned with such cultural aspects of human well-being as individual dignity and self-esteem. Moreover, development economics does not view individuals as actors who carry and embody a particular set of values and beliefs.

With this reflection, the author employs a delineated case study of urban migration and adaptation, involving the Badjaos of Davao City, to examine the question of how people can improve their standard of living in their material and economic life without losing their sense of ethnic identity. The data for this study were collected through long-term fieldwork from August 1997 to December 1999. The analytical description of the adaptive process suggests that for them to survive both economically and culturally, it is necessary to have a cultural intermediary who assists them in acquiring the knowledge, information and values that will enable them to navigate across the horizons of economic opportunity.

I はじめに

本稿の課題は、フィリピンのダバオ市におけるバジャウ (Badjao)¹⁾ を事例として、開発経済学が中心的課題とする経済的福祉の向上が生じるときに、先住民がもつ選択の自由・権利という観点から重要な福祉 (= 良く生きること) であるエスニック・アイデンティティにどのような変容が生じうるのか検討することである。具体的には、人類学的アプローチを援用しながら、経済的福祉の水準が異なる生業グループごとにエスニック・アイデンティティの立ち現れ方を記述分析することで、経済変化のプロセスとエスニック・アイデンティティの動的関係を探

* 東京大学大学院経済学研究科；Graduate School of Economics, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

1) ダバオ市における地域共通語であるセブアノ語での標準的な表記に基づく。なお、以下でイタリック体表示のものはサマ語である。

りたい。さらに、そうした変化をもたらす前提となる情報が誰によって、どのようにもたらされたかについても検討することで、経済的福祉の向上と、自律的に選べるカテゴリであり、そのカテゴリに応じて諸権利が制約されてしまうことがないような選択の自由としてのエスニック・アイデンティティが両立するための条件についても考えてみたい。

資本主義と国民国家という現代における開発の枠組みのもとで、辺境地域にまで押し寄せる市場経済化とライフスタイルの西欧志向化は、一部の人々の生活水準を向上させたが、一方で変化への適応能力に劣る人々を取り残す [佐藤 1997: 21]。貧困化した人々は早急に所得を向上させるためになりふりかまわずに生業（例えば物乞い）を選ばざるをえず、そこには自律性が維持される余地は乏しい。先住民はこうした立場に陥りやすい人々であり、本稿で取りあげるダバオ市のバジャウもそうした人々のひとつの例である。

ここで、本稿でいうバジャウと文献におけるサマ (Sama) の関係を整理しておこう。バジャウは、一般に漂海民、海のジプシーといったイメージで知られる。本稿で「バジャウ」とよぶ集団はこのような漂海経験者も含むが、陸サマでダバオ市に来てから「バジャウ」と呼ばれるようになった集団も含まれており、過去の漂海民研究 [cf. Lapian and Nagatsu 1996] で家船生活者として特徴づけられる海サマ (Sama Dilaut) であるところの「バジャウ」とは必ずしも一致しない。ただし、サマ語族であることは確かである。彼らが話すサマ語 (Sinama) は、南部フィリピン、マレーシア領ボルネオ、東インドネシアで使用され、タウスグ語、マレー語の影響を受けている [Akamine 1997]。フィリピン政府公刊の1995年センサスでは、同国のサマ語系人口は三つに分かれて記載されている。すなわち、「サマ」²⁾ は総人口 (68,431,213人) の0.27% (推定184,764人)、「バジャウ」(Badjao/Sama Dilaut) は同0.25% (171,078人)、陸サマのサブ・グループである「サマ・ディラヤ」(Sama Dilaya) は同0.07% (47,901人) である。また、ニンモが提唱し [Nimmo 1968]、その後、多くのバジャウ研究者に踏襲されたサマを北方と南方で異なるとする地理上の分類にしたがえば、本稿で扱うグループはホロ (Jolo) やシアシ (Siasi) 以北に分布し、フィリピン内海を移動する北方系サマに該当する。従来のサマ研究の多くは、タウイタウイ (Tawi-Tawi)、シタンカイ (Sitangkai)、サバ (Sabah)、スラウェシ (Sulawesi)、カリマンタン (Kalimantan) などを移動する南方系サマを対象とするものであり、北方系サマについては蓄積が少ない。

本稿の構成はつぎの通りである。Ⅱでは先住民の市場参加過程に関する先行研究の批判的検討を通じて本研究が取り組むべき問題を明らかにしたい。Ⅲでは調査地の概要と地域間移動・生業転換の状況について述べる。そのうえで、Ⅳでは経済的福祉の水準の異なる生業グループ

2) センサスの表記では、正確には Sama (Samal)。サマとサマルの区別については、1) サマ語族間での他称と自称、2) スルーでの非サマ語族によるサマ語族に対する他称、3) 調査地での非サマ語族によるサマ語族に対する他称、4) 分析の便宜上、研究者が用いてきた呼称など、それぞれのレベルで異なった議論があるので、稿を改めて取りあげたい。

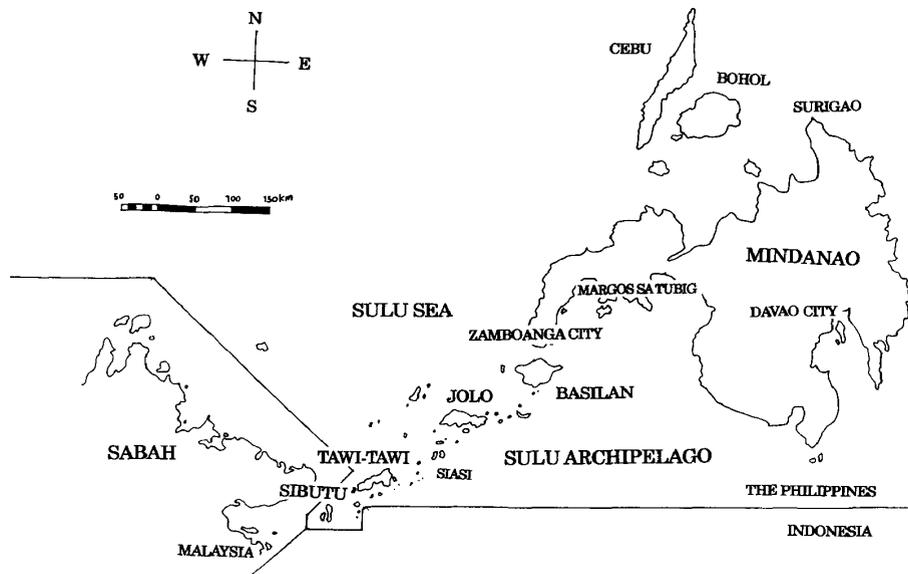


図1 ミンダナオ・スルー地域

別にエスニック・アイデンティティの立ち現れ方について、変化をもたらされたプロセスを含めて実態調査に基づく分析を行う。Vにおいては、以上の分析を踏まえ、バジャウが経済的福祉の向上と選択の自由としてのエスニック・アイデンティティが両立するための条件を述べる。

II 分析の枠組み

1. 先住民³⁾の市場参加過程に関する先行研究の問題点

(1) 開発経済学——エスニック・アイデンティティの看過

戦後、新生国民国家は「開発」を国家政策の中心に据え、諸民族の「国民化」と「市場化」を要請したが [川田 1997; 原 1997], その理論的支えとなるはずの開発経済学は、先住民族の市場参加過程、すなわち変化の過程そのものを理解するための直接的な理論をもたない。初期の二重経済発展論は、経済的のみならず文化的にも異質な2部門間、すなわち農業・農村部門から工業・都市部門への資源移転を議論の中心とした [Lewis 1954]。しかし、二重性はもっぱら所得・賃金格差として把握されるようになり、部門間の文化的断絶、あるいは部門内における経済的・文化的異質性の問題は取り上げられなかった [村上 1996]。その後、今日まで主流

3) 国際機関にみる先住民の定義の変遷については、たとえばILO [1993]のサーベイが参考となる。本稿では、フィリピンをフィールドとする便宜上、フィリピン共和国法第8371号「1997年先住民権利法」(The Indigenous Peoples Rights Act of 1997)の第2章3-h項にある、Indigenous Cultural Communities/Indigenous Peoplesの定義にしたがい、1)先住性と、2)文化的少数性を満たす人々を先住民とみなす。ここで、先住性とは、現在のフィリピン国家の領域に先植民地期以前より居住していたことを指すが、すでにそうした先住地から強制退去させられたり、他の場所に再定住したりした人々にも適用されることに注意したい。

である新古典派経済学の開発理論においては方法論的個人主義が想定されているので、原理的に個々人の意思決定は彼の属する社会・文化・イデオロギーから自由になってしまう。そこに「民族」や「エスニシティ」を明示的に議論する余地はない。

最近では、不完全情報下で人々が市場に参加する際の社会的枠組みとしての制度が生成される機構について新制度派アプローチ [Harriss *et al.*: 1995] が有効とされる。ここでは新古典派的な合理的個人の仮定は維持されながらも、個人が異なるメンタル・モデル (mental model: 置かれている環境とその作用に関する認識) をもつという但し書きがつく [North 1995: 18]。個人の選択はメンタル・モデルを通じて解釈された制約条件のもとでの利潤最大化行動の結果であり、それは部分的にはエスニシティなど文化的要因に影響されると解釈できる。このアプローチにおいて制度変化は取引費用削減を契機とする。すなわち、新しい制度への潜在的需要は常に、社会の資源賦存状態の変化に対応して相対的に稀少となった資源をより効率的に利用しようとする方向に生じることになり [cf. 速水 1995]、これは合理的個人だけを公準とする経済理論で説明できる。しかし、現実には、どのような制度が供給され成立するかという点については、ノース自身も指摘しているように経済理論では説明しきれない個々の社会における社会慣習やイデオロギー、政治過程などの要因が重要となってくる。そのため、このアプローチだけでは、制度の成立を規定するであろう地域固有の要因を明らかにすることはできないという批判もある [cf. 原 1997: 30-31]。

こうした枠組みにおいてエスニシティは無視されているか、せいぜい固定的なレッテル (例えば肌の色や言語、宗教で区別される) として、経済的結果に対する説明変数 (道具) としてみなされるだけである。さらに根本的な問題は、こうした経済開発理論にみる開発目標 (生活水準の向上=貧困の低減) の構成内容がもっぱら所得などの経済的福祉に偏っており、エスニック・アイデンティティ自体が人々にもたらす、例えば「～であることを選択できる自由」のような福祉 (well-being) はそもそも全く考慮されていないことであろう。

(2) 潜在能力アプローチと人類学の援用——福祉 (生活の質) としてのエスニック・アイデンティティ

これに対して、開発を「その社会の各種の人間がそれぞれの日常的な生活・行動において、利用しうる選択の範囲が拡大していく過程」と再定義し、「潜在能力」(capabilities) という概念を導入した A. センは開発経済学の中心課題たる貧困研究に「人々の経済機会利用能力の拡大」という新たな視角を拓いた [Sen 1985; 1988]。この視角によれば、先住民は何らかの潜在能力を欠くために市場参加しにくい貧困層として把握できる。実際、センは貧困の個別特殊性を重視するから、方法論においては非市場的な直接観察など人類学的な調査方法による実証分析の必要性を説く。しかし、潜在能力という概念は高い抽象度ゆえに操作性という点において難点が

あることは否めないし、個人を重視するために集団としての潜在能力が考慮されておらず [佐藤 1997]、そのままでは集団の存在を前提とする「民族」の分析に役立つような実証概念に結びつかない。

また、センは経済的結果ばかりでなく、そこに至るまでの個々人にかかわる「選択の自由」から発展 (development) の性格を評価するべきであると主張し、開発研究の課題を「人々が生き続ける生活の性格」を分析することとした。従来の方・所得を中心とするアプローチよりも人間志向的なアプローチであるという点で、エスニック・アイデンティティというような非経済的で集計不可能な変数を福祉に入れようと思われる。これに対してダスグプタは、センのアプローチでさえも生活水準の指標は、財やサービスを手に入れることのできる権利、いわゆる積極的権利の指標に偏っていると批判して、消極的権利 (何かをされない、もしくは拘束を受けない権利) を強調する [Dasgupta 1993]。ここには政治的自由や表現の自由が含まれるから、エスニシティに関わる様々な自由も、ひとつの消極的権利として「生活の質」(生活水準)の構成要素として捉えられよう。ただし、貧困の実証分析におけるダスグプタのアプローチはセンの方法論よりも経済学的で、文化的価値についてはシステムに影響を与える道具とみて明示的には分析の対象としない [ibid.: 8]。

ここでセンやダスグプタの問題意識を念頭に、先住民の当事者性に目をくばり、そのエスニック・アイデンティティの理解に役立つような枠組みを探すと、人類学における先住民の「文化戦略」[清水 1997]あるいは「適応戦略」[Eder 1987; cf. Cohen 1974]という概念にたどりつく。例えばエダーは、先住民を主体性ある個人の集まりと捉え直し、変化の過程における個人の行動と選択を重視するために「適応」(adaptation)という概念を導入し、フィリピンにおけるネグリート系先住民のひとつであるパラワン島のバタックの変容過程について事例研究を行った [Eder 1987]。彼の定義によれば適応とは「ある人間集団が生活上の問題群にうまく対処していく能力によって測られるような成功」であり、生物的・経済的な生き残りばかりでなく、文化特性も重視される。つまり、エダーがいう生活水準には、経済学でいう所得の多さや財の保有ばかりでなく、「民族としてどのような社会的・文化的生活を続けられるのか」という問題が含まれている。さらに、エスニック・アイデンティティは、適応の結果、諸民族との関係のあいだで変化するだけではなく、適応の過程で生じる社会的・経済的・心理的な問題群に対処するための能力を支えるための資源でもあると捉えられている。ここにおいて経済的福祉とエスニック・アイデンティティはともに重要な福祉をなすとともに、相互に影響を及ぼしあうものとして捉えられているのである。

2. 分析の視点

エダーのこうしたエスニック・アイデンティティの捉え方に基づき、本稿では、ダバオ市に

におけるバジャウの都市経済適応過程について、経済的福祉の変化がエスニック・アイデンティティのどのような変容をともなっているのか記述的分析を行いたい。

第一に、実体としてのエスニシティ（たとえば言語や宗教）の維持・喪失ということばかりでなく、都市市場社会の中で「彼らがどのようにエスニック・アイデンティティを表現し、また利用しているのか」探求したい。エスニック・アイデンティティを福祉として捉えたとすれば、その表現の仕方がたとえば他者に対して自虐的であれば、選択の自由・権利という観点から福祉水準は低下するからである。

第二に、エダーは言及していないが、エスニック・アイデンティティのあり方や変化の過程において、その前提となる環境認識・行動様式を変化させる契機となるような情報源がどのようなものであったか検討したい。これはいわば、開発をある望ましい価値を促進することであると考えたときに、その価値が誰からもたらされたときに受容がなされやすいか、という問題である。同時に、誰からもたらされた場合にバジャウは自律性を保って変化を受容することができるか、という問題でもある。

本稿における操作的概念としてのエスニック・アイデンティティであるが、そもそもアイデンティティとは「社会的な対他関係の中で存在するもので、なにか固定的な心理的な状態を示すものではない」[福島 1998: 293-294]。したがって、近年の人類学的研究において、他者との非対称な社会関係の中で文脈や状況に応じて動的に表れる概念として「民族」を捉える関係論的見識が自明のものとされているのは当然である [林 1998a]。しかし、本稿はアイデンティティがいかに状況依存的で重層的か、他民族との拮抗関係においてどのように生成するのか、という詳細を報告することを意図しない。本稿ではそうした関係論的アプローチを従来の経済学が看過してきたものとして援用しながらも、適応過程において立ち現れたエスニック・アイデンティティがその状況においてどのように機能しているのか分析できるよう、必要であれば実体論的な視点に立ち返えることになろう。したがって、「あるエスニック集団に帰属するという意識と、それゆえに自覚的に利用できる諸資源の集合」としてエスニック・アイデンティティを緩やかに定義しておきたい。

以上が本研究の基本的な分析の枠組みである。

III 調査地の概要と地域間移動・生業転換の状況——量的調査の結果から

1. 調査地の概要

調査の舞台であるダバオ市は、フィリピン南部のミンダナオ島に位置し、ミンダナオ⁴⁾の恵ま

4) ここではスルー諸島を含む。

れた自然条件と天然資源（鉱物・水産など）を背景に、フィリピンの一次産業の要衝、および有数の港湾都市として発展してきた。1995年現在で約百万人の人口を擁し、単独の政令指定都市としては全国第4位の規模である。1995年人口センサスによれば、同市の就業構造は農業志向型交易都市としてサービス業（37.8%）、商業（19.0%）と農林業（25.2%）が大きく、工業は8.0%である。これに建設業7.6%、漁業1.2%、電気・水道・ガス業0.6%、鉱業0.4%が続く。政府公刊の1997年家計所得・支出調査から住民の所得源をみると、住民をなす202,983世帯のうち主に賃金・俸給から所得をえているものが56.1%、起業家活動が29.0%（うち農業6.6%、非農業22.5%）であるから、自営業部門が雇用吸収に一定の役割を果たしていることがわかる。

人口学的にミンダナオ地域を眺めると、約6割を占めるセブアノ（Cebuano）のほか、ムスリム諸族のうち主要3大グループ⁵⁾が全体の約15%、また非ムスリムの少数・先住民も4%ほどを占めるなど、多民族・文化的多様性をもつことが大きな特徴である〔青山 1997〕。この多様性は、しばしばキリスト教徒人口と非キリスト教徒人口のあいだの社会経済的格差として現れる。先住民の貧困問題は、ミンダナオ最大の都市であるダバオ市にあっては、ビサヤ諸島やミンダナオ他地域から流入する都市移住者の貧困問題の一種として不法占拠者居住区に顕在しやすい。本稿の調査地も数年後に土地解放が予定されている不法占拠者居住区でイスラ・ベレサ⁶⁾という。ここはダバオ市の東部沿岸に横たわる砂州で、およそ9ヘクタールの面積に約1,300世帯・計10,000人ほどが暮らす。人口の言語族別内訳では、ムスリム諸族（マラナオ、タウスグなど）が全体の6割を占め、ダバオ市全体では圧倒的多数を占めるセブアノ語系キリスト教徒人口を上回っていることが特徴である。⁷⁾ 調査地を管轄するバランガイ（末端行政単位）も首長ほか、8人の評議員のうち7人をマラナオが占めており、市内でもムスリム優勢地区とみなされている。

以下で使用する資料は、イスラ・ベレサに居住するサマ語族集団でダバオ市においては広く「バジャウ」と他称・自称される集団に対して、1997年8月初旬～1999年12月末まで継続的に行われたフィールド・ワークによって収集されたものである。実施された調査の概要は表1のとおり。

5) タウスグ、マラナオ（Maranao）、マギンダナオ（Maguindanao）。

6) プライバシー保護のため、以下、調査地と人名は仮名とする。

7) 1995年人口センサスによれば、ダバオ市総人口1,002,922人のうちセブアノは76.4%を占める。これに対してムスリム主要グループであるタウスグは0.65%、またマラナオは0.41%にすぎない。ダバオ市の文脈では、非キリスト教徒系人口はマイノリティとなる。ここで、脚注3で定義したようにダバオ市のサマは国家レベルでは先住民のカテゴリに該当するが、本稿以下の分析で明らかなようにダバオ市は彼らの先住地ではないという点で、いわゆるダバオのネイティブの先住民（たとえばマノボ、バゴボ等の内陸少数民族）とは異なっていることを指摘しておきたい。ダバオにおける先住性を基準とするならば、セブアノに代表される北方クリスチャン、マラナオ、マギンダナオ等の低地ムスリム、サマ、ラミスサ、タウスグ等スルー系民族はすべて移民である。詳述する紙幅はないが、このうち低地ムスリムとスルー系の移民はミンダナオにおけるキリスト教徒とムスリム分離独立派の武装闘争などによる難民としての性格が強い。

青山：ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程

表1 ダバオ市のバジャウに関する調査の概要：1998年～1999年

フェーズ	調査名	対象	目的	方法	サンプル数	種類	期間	調査チーム
1	1. 基礎的世帯調査	バジャウ	社会・経済的特性 移民特性 経済的特性 住居・施設 社会的関係	質問紙 面接・他計式 家庭訪問	172世帯	量的調査	1998年 2月2日～ 3月6日	助手3名 (セブアノ) 通訳2名 (サマ)
2	2. 基礎的世帯調査	タウスグ マラナオ ラミスサ セブアノ	社会・経済的特性 移民特性 経済的特性 住居・施設 社会的関係	質問紙 面接・他計式 家庭訪問	190世帯	量的調査	1999年 2月1日～ 3月30日	助手6名 (セブアノ)
	3. 自己イメージ・ 民族間イメージ 調査	バジャウ	自己イメージ 他者イメージ 民族間の接触の有無	質問紙 面接・他計式 家庭訪問	172世帯	量的調査	1998年 10月15日～ 11月30日	助手1名 (セブアノ) 通訳1名 (サマ)
		タウスグ マラナオ ラミスサ セブアノ	自己イメージ 他者イメージ 民族間の接触の有無	質問紙 面接・他計式 家庭訪問	190世帯	量的調査	1999年 2月1日～ 3月30日	助手6名 (セブアノ)
	4. 漁船・漁具保有 調査	バジャウ	船の所有 船の利用方法 漁具の所有と種類	質問紙 面接・他計式 家庭訪問	184世帯	量的調査	1998年 10月15日～ 11月30日	助手1名 (セブアノ) 通訳1名 (サマ)
3	5. 社会的不平等調 査	バジャウ	各家族の社会的ステ ータスに関する主観的・ 全体的評価 評価基準 カテゴリの名称	指示的面接 他計式 家庭訪問	20名 (母数:184)	量的調査	1999年 1月22日～ 4月27日	助手1名 (セブアノ)
4	6. 月例家計調査	バジャウ	所得・支出 貯蓄・負債 家族 社会的出来事 その他	質問紙 面接・他計式 家庭訪問 (参与観察)	5世帯	量的調査 質的調査	1999年 5月3日～ 12月6日	助手1名 (セブアノ)
	7. 口述史調査	バジャウ	家族関係 経済的状況・職業 社会的活動・出来事一般 自己イメージ, 計画, 願望 サポート・システム, エス ニック・アイデンティティ	自由面接法 テープ録音 家庭訪問 (参与観察)	5世帯から 数名ずつ	質的調査	1999年 5月10日～ 12月28日	助手1名 (セブアノ)
	8. 生活時間調査	バジャウ	活動の種類と場所 参加したメンバー 利用された物品 収入・消費・支出	参与観察 (定型記録用紙)	5世帯	質的調査	1999年 5月17日～ 8月31日	助手1名 (セブアノ)

イスラ・ベレサには、ふたつのバジャウ居住地がある。ひとつはアラスカと呼ばれ、砂州の北東に位置する1ヘクタールほどの地域である。この地区では、広場をはさんで杭上家屋が向かいあうかたちで建てられており、船の通り道として重要な海岸部を除いて外部に対しては閉じた構造になっている。もうひとつはアリーナ・ピカスと呼ばれ、ピカス（反対側）という名前のとおり砂州の南東にある。こちらはセブアノやタウスグなど非バジャウ系住民居住区の中の海岸沿いに小さなバジャウ集住地として存在しており、外部に対してもむしろ開いた構造をもつ。世帯数は、アラスカで172、アリーナ・ピカスで12、イスラ・ベレサ全体で184である。表2に、イスラ・ベレサのバジャウ地区住民の基本的属性を示しておく。

2. 移動理由と居住地形成過程

表3は、バジャウ地区住民のうち、世帯主を取り上げ、その属性と地域間移動歴を概観したものである。世帯主は男子が9割を占め、その平均年齢は40歳であった。出生地をみるとダバオ市以外が94.6%を占め、全体的に移民世帯であるといつて差し支えない。住居変更をともなう移動回数は移民全体（170人）の平均で1.4回である。出生地は、南サンボアンガ州（78.7%）とスルー州（12.6%）の2州が全体の9割を占めており、調査地のバジャウ住民の多くがいわゆる北方系サマであると考えられる。市内では一般に「バジャウ」と呼ばれ、言語的な違いのほか、外見ではキリスト教徒やイスラーム教徒⁸⁾人口と比べてより褐色の肌、痩身だが頑健な体格、赤茶けた髪や簡素な服装などで見分けられる。

出生地からの転出理由で最も多いのは、「治安の悪化」（66.7%）である。回答者の多くが用いた「ゲラ（gira: 戦争）」という言葉からは、1970年代初頭から10年以上も続いたムスリム独立分離派とフィリピン政府軍の武装紛争によるスルー諸島・サンボアンガ地域における治安の悪化が想起される。多くの場合、直接紛争に巻き込まれたのではなく、紛争激化にともない避難民となったタウスグなどが比較的平和であったサマの居住地に流入したために、二次的難民として流出に追い込まれたようである [cf. Nimmo 1990a; 1990b]。また転入時期が1985年以降の場合には、「治安の悪化」は「海賊行為の多発（daghang tulisan）」として語られることが多い。海賊行為の主体者はホロアノ（Joloano）とされ、具体的にはタウスグやヤカン（Yakan）などムスリム諸族である。もともと政治的にはマージナルな存在であるから、「治安の悪化」は政治的緊張というよりも、生業（漁業）の継続困難という問題として立ち現れたはずであり、経済難民としての側面が強い。「治安の悪化」につぐ転出理由は、「生活苦」（14.4%）、「親族の呼び寄せ」（8.6%）であった。イスラ・ベレサへの最初の移住者はバジャウである。最も早い者は、すでに1960年代後半にサンボアンガ市から砂州南東部（現在のアリーナ・ピカス）に住み着いて

8) 本稿でいうイスラーム教徒あるいはムスリムとは、礼拝所（モスクなど）を有し、礼拝に参加する者を指す。

青山：ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程

表2 イスラ・ベレサ、バジャウ地区住民の基本的属性

世帯数・人口	
合計	184
アラスカ	172
アリーナ・ピカス	12
1世帯当たりの構成員数(平均)	5.3
1世帯当たりの子供の数(平均)	3.5
バジャオ地区総人口	981
性別(対総人口比率)	
男子	51.7%
女子	47.5%
年齢	
平均年齢	22.5歳
年齢構成(対総人口比率)	
0～6歳	21.6%
7～15歳	16.7%
16～29歳	32.3%
30～49歳	21.0%
50歳以上	7.7%
就学経験年数(7歳以上対象)	
平均	1.0年
最頻値	0年
セルフ・アイデンティフィケーション (対総人口比率)	
サマ	97.8%
(陸サマ)	(65.1%)
(海サマ)	(32.7%)
ラミスサ	1.5%
セブアノ	0.5%
アタ	0.1%
宗教(対総人口比率)	
伝統的・土着信仰(オンボ)	80.3%
イスラーム教	10.8%
キリスト教	8.9%
(ボーン・アゲイン・クリスチャン)	(4.8%)
(ローマン・カソリック他)	(4.1%)
出生地(対総人口比率)	
ダバオ市以外	68.6%
ダバオ市	31.2%

出所：「基礎的世帯調査」(表1参照)。

注：回答不明を含まないため合計は必ずしも100%とにならない。

表3 バジャウ地区世帯主の属性と地域間移動

世帯数合計	184
性別	
男子	89.1%
女子	10.9%
年齢	
平均値	40.0歳
中央値	35.5歳
最頻値	25.0歳
出生地	
ダバオ市	5.4%
ダバオ市以外	94.6%
移動歴(母数：移住者170)	
住居変更をともなう移動回数	
平均値	1.4回
出生地	
南サンボアンガ州	78.7%
スルー州	12.6%
ボホール州・セブ州・スリガオ市	3.9%
ミンダナオ島内その他の諸州	3.5%
その他の地域	1.2%
現住所転入前の居住地	
南サンボアンガ州	74.7%
スルー州	9.2%
ダバオ市および南ダバオ州内	8.0%
ミンダナオ島内その他の諸州	2.3%
セブ州・スリガオ市	2.3%
マニラ首都圏および近隣	2.3%
出生地から転出した理由	
治安の悪化	66.7%
生活苦	14.4%
親族の呼び寄せ	8.6%
転入先で仕事を探すため	3.3%
結婚にともなう転居	2.9%
転入先で住居を探すため	1.2%
高潮に被災	0.6%
現住所に関する情報の入手方法	
家族・親族	82.8%
自分でみつけた(パイオニア移住者)	14.9%
友人・隣人	2.3%
現住所への転入時期	
1965～69年	1.1%
1970～74年	9.7%
1975～79年	8.0%
1980～84年	10.2%
1985～89年	14.8%
1990～94年	30.7%
1995～99年	25.6%

出所：「基礎的世帯調査」(表1参照)。

注：回答不明を含まないため合計は必ずしも100%とにならない。

いる。その後、ムスリム諸集団やセブアノの流入が続き、現在、バジャウはイスラ・ベレサ総人口のうち約1割を占める少数派である。ただし、ダバオ市全体ではバジャウの人口は1%にも満たないことを考えれば、⁹⁾ イスラ・ベレサにおけるバジャウのプレゼンスは相対的に大きい。ピカスに流入したバジャウのほとんどは80年代半ば、高潮を理由に砂州北東部のアラスカ地区に集団移住した。80年代以降、出生地のプッシュ要因が解決しない一方で、イスラ・ベレサに定着したバジャウが情報や転居直後のシェルター提供機能を果たすことで親戚・友人を介した流入が続いて現在に至っている。こうした血縁・地縁によるチェーン・マイグレーションはなにもバジャウ特殊なことではない [cf. 中西 1991]。しかし、ホロ・スルー地域、サンボアンガ市などの出生地のちがいを超えて一カ所に集住し、外部者に対して「バジャウ」としてまとまることで他の言語集団との摩擦を避けて集団的安全をえている点は、少数派かつ社会経済的地位も低い彼らなりの戦略ととれる。¹⁰⁾ また、それが可能であったのも、社会組織が緩やかであり、居住地構成員の接合・分離に抵抗がないこと [cf. Nimmo 1990a]、かつ伝統的な生態的ニッチである珊瑚礁空間 [cf. 長津 1997; 門田 1997] に通じる環境をダバオ市沿岸部に発見できたこと、などによると推察される。

3. 生業転換の状況

しかしながら、ダバオ市のバジャウは出生地そのままの生業を展開したわけではない。表4は、出生地における時点とダバオ市における調査時点について、回答者の生業あるいは労働力状態についてそれぞれ尋ねた結果をまとめたものである。

表頭で読みとれるように、出生地においては漁業を生業としていた世帯主が全体のほぼ7割にのぼる。当時、学齢期にあった者や主婦など非労働力の状態であった者(14.1%)や十分な所得機会とはみなしえない主婦のマット織り(3.3%)を除くと、非漁業を生業とした者は1割強である。内訳は、農業(2.2%)、魚販売業(2.2%)、貝殻・真珠販売業(2.2%)、および港湾労働者を含む日雇い労働者などを含む雑業(6.5%)であった。こうした非漁業に就いていた者はよく出自をみると親の代からすでに陸地定着化していた陸サマ系である。それ以外の世帯主については、出生地においてはほぼすべてが漁業を生業とするいわゆる専門漁民であったといつてよいだろう。

一方、表側は調査地時点における生業の分布を示しており、漁業を生業とする世帯主が全体

9) 1995年人口センサスによれば、ダバオ市総人口のうち、バジャウ/サマ・ディラウトは0.05%、サマ(サマル)は0.29%、サマ・ディラヤは0.01%未満と報告されている。

10) ただし、地区全体のバジャウ住民をまとめるような唯一絶対のリーダーは存在しない。本稿でのちに見るように、この地区の住民はいくつかのサブ・グループから構成され、そのグループごとに宗教生活、社会生活、経済活動など必要に応じて異なったリーダーが存在する。こうした社会組織の緩やかさは、政府や援助団体介入のさいのコンタクトの決めにくさや、その後の政策実施費用の高さにつながっていると考えられる。

表4 バジャウ地区世帯主の生業転換

現住所における調査時点の生業 労働力状態								
出生地における 生業 労働力状態	合計・度数 行比率 列比率	漁業	貝殻・真珠 販売業	古着販売業	マット織り	建設労働者	その他の 非漁業	失業・ 物乞い・ 扶養家族化
合計・度数	184	90	38	16	4	4	9	24
行比率	100.0%	48.9%	20.7%	8.7%	2.2%	2.2%	4.9%	13.0%
列比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
漁業	128	82	24	6			3	13
	100.0%	64.1%	18.8%	4.7%			7.7%	10.2%
	69.6%	91.1%	63.2%	37.5%			22.2%	54.2%
非労働力状態 (学生・主婦など)	26	5.00	9	4	1	1		4
	100.0%	19.2%	34.6%	15.4%	3.8%	3.8%		15.4%
	14.1%	5.6%	23.7%	25.0%	25.0%	33.3%		16.7%
マット織り	6			1	3			2
	100.0%			16.7%	50.0%			33.3%
	3.3%			6.3%	75.0%			8.3%
農業	4	1		1				2
	100.0%	25.0%		25.0%				50.0%
	2.2%	1.1%		6.3%				8.3%
魚販売業	4	1					1	2
	100.0%	25.0%					25.0%	50.0%
	2.2%	1.1%					11.1%	8.3%
貝殻・真珠販売業	4		3	1				
	100.0%		75.0%	25.0%				
	2.2%		7.9%	6.3%				
その他の非漁業	12	1	2	3		2	3	1
	100.0%	8.3%	16.7%	25.0%		16.7%	25.0%	8.3%
	6.5%	1.1%	5.3%	18.8%		66.7%	33.3%	4.2%

出所：「基礎的世帯調査」(表1参照)。

の5割弱に減少していることがわかる。かわって増加した非漁業のうち顕著なのは、貝殻・真珠販売業(20.7%)、ukay-ukayと呼ばれる古着販売業(8.7%)である。真珠にしる古着にしる地場の製品ではなく、¹¹⁾ 港湾都市として物流の要衝であるダバオ市に移入してくる製品である。ダバオ市は地場人口の規模が大きいいうえ、ミンダナオ有数の観光地でもあるから、貝殻・真珠

11) 筆者の聞き取り調査によれば、ダバオ市における真珠卸売・小売業はマラナオが主に担っており、彼らは香港などから養殖真珠を直接買い付けている。バジャウはこれを小口・現金で購入する。一方、古着販売業はシンガポールの中国系商人に集積される日本、アメリカ、オーストラリア、韓国などからの古着をダバオ市の中国系フィリピン人が卸売りしているもので、これを店舗をもつセブアノ系小売商がバンドル(100キロ)単位で買い付ける。各バンドルに必ず含まれる不良品は通常商品にならないが、セブアノ小売商の中にはこれを安値でバジャウに売るものがある。それを含めて安い古着を単品で買って公設市場で行商するのがバジャウである。

販売業や古着販売業はこうしたダバオ市の都市としての性格に適応した生業のようにみえる。一方で、「失業・物乞い・扶養家族化」したと回答した者（13.0%）もめだつ。物乞いは、一見、非生産的で不適応な状態にみえるがそうではない。ダバオ市内には大小多くの公設市場があり、豊富な生鮮食料品が毎日取引されている。こうした回答を寄せた者の多くは、そうした市場で恒常的な物乞いをすることで糊口をしのぎうるのである。

伝統的な生業（珊瑚礁空間での漁撈活動）の継続が困難になり、¹²⁾ ダバオ市においては漁業から非漁業への生業転換を経験した世帯主が少なくないことが明らかになった。一方で、漁業を生業とする者が現在も全体の5割近くを占めており、いまだに漁業¹³⁾こそバジャウらしい生業といえなくもない。次章で詳しく取り上げるが、ひとことでいうならば、現在も漁業を生業としていると回答した者のうちには、現実には「現在も漁業を生業と考えている」といったほうが正確であって、市場交換どころか自給レベルにも満たないような生産性の低い状態に陥っていることもまれではない。この意味で、生業転換の結果、ダバオ市の市場経済にかろうじて接合したように見える新たな生業は、貝殻・真珠販売業と古着販売業であるが、じつはこのふたつは、行商という形態を考慮するとダバオ市ではバジャウだけにみられる生業である。同様に、物乞いも公設市場で生鮮食品を採集するという形態は非バジャウの物乞いにはみられない。表2に示したように、バジャウ地区住民はほぼ一様に低学歴なので人的資本の点からみてダバオ市の労働市場への参入機会は自ずから限定されるとしても、なぜ漁業、真珠、古着、物乞いという限られた生業に集中するのであろうか。じつはこの4つの生業はそれぞれにバジャウであること（=エスニック・アイデンティティ）を利用して展開されている。この点について生業ごとに実現している経済的福祉とともに次章で事例分析をする前提として、次節ではイスラ・ベレサ居住のバジャウが生業によって5つのサブ・グループに分けられることを簡単に説明しておきたい。

4. 適応単位としてのカンポンと生業グループ

政府統計をベースに作成した客観的指標からは一様に社会経済的福祉が低いようにしかみえ

12) 伝統的生業から現在の生業への転換がどのような具体的過程を経て生じたのかという疑問について、本稿は、1) バジャウは時間概念について明確に把握していないことが多く、質問紙調査で個人の職歴について時系列的にデータを収集することは極めて困難、2) 出生地側での実態調査を実施していない、という理由から厳密には答えられない。これについては、次章で個々の事例について検討することで代替したい。伝統的生業である珊瑚礁空間での漁業の放棄がなぜ生じたのかという疑問についても同様であるが、筆者のフィールド・ワークの範囲では、1) 漁場における治安の悪化、2) 漁業資源の減少、3) 資本供給者の減少などの諸要因が考えられる。いずれにしても、新しい生業により良い機会を積極的に見いだしたというよりも、伝統的生業の継続困難によって転換を迫られる形で生じた可能性が大きいようである。

13) ただし、漁業については漁業を魚類だけでなくさまざまな水界生物の採捕を含む活動を含むという意味で漁撈活動〔秋道 1995: 8〕と捉え、採集技術の種類や変化をさらに検討する必要がある。

ないバジャウ地区住民 [Aoyama 1998] も、彼らの主観的評価によればステータスの序列が存在し、その基準として経済的な指標、とくに生業が用いられることは、筆者が並行して実施した主観的評価による不平等調査によって明らかになった。調査の設計と方法については、Lynch [1959] と Eder [1982] にほぼ全面的に依拠したのでここでは詳述しないが、バジャウ地区住民（全184世帯）から新規移民者を除いたうえで、先に実施した質問紙調査の結果に基づいて出生地、生業（労働力状態）、所得カテゴリの順に層化し、20世帯20名の評価者を抽出して実施した。ここでは結果の分析は行わず、バジャウ地区住民のあいだに存在する階層意識が、個人や個別世帯に対するものというよりも、個別世帯の集まったグループに対するものであったことを指摘しておきたい。それは、20人の評価者のうち13人が各世帯を個別に評価するのではなく、まずいくつかの「カンボン」 (*kampung*) に分類してから、そのカンボンごとにステータスの評価を行い、順位づけるという評価行動をとったことに顕れた。カンボンの語源は村をさすマレー語で、すなわち地縁集団のことであるが、本稿でいう「カンボン」は、「溯って確認できようができれば何らかの親族関係が存在している個人の集まりをさす。この言葉はまたある特定の地域に居住する、つまり地縁のある親族集団のみをさす場合もある」 [Bottignolo 1995: 266] と同義である。なおサマは、低地キリスト教徒社会同様に、Ego の父方母方を等しくたどる双方系を基盤とするとされる [cf. Nimmo 1990a; 長津 1997]。

要するに、バジャウ地区住民における社会的序列は個人に対するものというよりも、カンボンのような集団に対してより明確に把握されたのである。13人の評価者のあいだでカンボンの数は一致しなかったが、最大数である5つをとり、代表とされる世帯を個別訪問して、自分たちのグループに属するとみなす世帯を選択してもらった。¹⁴⁾ 各グループに属する世帯の数には6~27とかなり幅があるが、各グループの最低位から最高位までの順位分布の範囲を比較すると5つのグループとして序列がつけられることがわかった (表5)。評価基準で生業が重要視されたことから、さきの代表者5名にはグループを構成する世帯の男子と女子の生業の確認をした。その結果、5つのグループは特定の生業に対応していることがわかった。すなわち、ステータスの高い順に、1) 男子：貝殻・真珠販売業 (ホテル)、女子：主婦か非漁業、2) 男子：貝殻・真珠販売業 (ホテル・行商)、女子：古着販売業、3) 男子：貝殻・真珠販売業 (対貨物船・行商)、女子：主婦か古着販売業、4) 男子：漁業 (ボボ *bubu*: 魚伏籠・パラングレ *palangre*: 延縄漁)、女子：古着販売業・物乞い、5) 男子：漁業 (パナ *pana*: 突き漁)、女子：物乞い、という構成が典型であった (表6)。

14) この際には、とくに「カンボン」や「親族」という用語で誘導せず、「あなたがたのグループ (*grupo ninyo*) に属するのは誰と誰ですか」という質問を用い、前段の調査で使用したカードによる分類を依頼した。「なぜ同じグループなのですか？」という質問に対しては、「親戚や隣人であり似ている」という答えや「これがカンボンというものだ」という説明が大半であった。その結果、5つのグループのうち、ステータスが最上位のグループの代表者は「カンボン」という言葉を使わなかったため、以下の議論ではこれらの集団をカンボンではなく、生業グループとよぶ。

表5 グループの順位

グループ	世帯数	順位 ^a		
		平均	最高	最低
1	6	5.8	2.0	15.0
2	8	16.6	1.0	27.0
3	18	52.2	12.0	128.0
4	27	120.1	90.0	148.0
5	27	166.2	121.0	184.0

出所：「社会的不平等調査」（表1参照）。

^a 順位とグループの分散分析結果は、自由度4，F値228.9，有意確率0.000。

表6 5つのグループと生業

グループ	世帯数	生業			
		男子	比率	女子	比率
1	6	貝殻・真珠販売業	66.7%	主婦	66.7%
		古着販売業	16.7%	古着販売業	16.7%
		メカニック	16.7%	清掃人	16.7%
2	8	貝殻・真珠販売業	37.5%	古着販売業	62.5%
		古着販売業	12.5%	主婦	25.0%
		スナック販売業	12.5%	スナック販売業	12.5%
		日雇い労働者	12.5%		
		サメ漁業	12.5%		
		失業	12.5%		
3	18	貝殻・真珠販売業	77.8%	主婦	61.1%
		漁業（パナ）	11.1%	古着販売業	16.7%
		古着販売業	5.6%	マット織り	11.1%
		物乞い	5.6%	物乞い	11.1%
4	27	漁業（ボボ／パラングレ）	66.7%	古着販売業	55.6%
		物乞い	33.3%	物乞い	29.6%
5	27			主婦	16.7%
		漁業（パナ）	100.0%	物乞い	81.5%
				主婦	18.5%

出所：「社会的不平等調査」「基礎的家計調査」（表1参照）。

IV 生業グループ別にみたエスニック・アイデンティティの立ち現れ方に関する分析——質的調査の結果から

本章で利用するデータは、前章で抽出された5つの生業グループからそれぞれ代表的世帯をひとつずつ抽出して、参与観察、生活時間調査、口述史調査などの質的調査を行った結果であ

る。世帯を分析単位とするのは、ひとつは、伝統的にバジャウ社会の基本単位は個別世帯¹⁵⁾であり、珊瑚礁空間における漁撈活動の際には構成員それぞれが採集活動を行うなど世帯が生産・消費活動の単位であったばかりでなく、宗教的行為を行う単位でもあったことである [Stone 1962; Nimmo 1990a; Bottignolo 1995]。いまひとつとしては、現在のダバオにおけるバジャウにみられる世帯内の分業をみると、夫と妻の共稼ぎ、あるいはそれに未婚の子供が加わることもあるなど、複数の稼ぎ手がいることが多く、個人の生業を分析するのみではある生業を可能にしているメカニズムを見落とすことになるからである。また、世帯は属するグループの資源を利用することもあるので、必要に応じてグループ・レベルの分析も含める。

じつは筆者は、前章で使った主観的な調査に先立って客観的指標による世帯悉皆調査を実施したが、政府統計をベースにした質問項目がバジャウ内部の経済的格差（＝経済的福祉の違い）を把握できるほど厳密ではなかったため、包括的な比較はできなかった。この欠点を補うため、以下で取り上げる5つの世帯については、その後、就業状態と所得、栄養摂取と健康、住居設備、耐久消費財や船の所有、就学年齢の子供の教育など一般生活水準に関する客観的指標を収集しなおした（表7）。その結果、彼らが主観的に判断した社会的序列と外部者である筆者が設定した客観的指標による経済的福祉の格差に明らかな対応があった。したがって、つぎのような視点から記述を進めたい。1) 経済的福祉の水準は生業に依存しているから、そこでどのようにエスニック・アイデンティティが利用されているのか検討することで、彼らの経済的変化とエスニック・アイデンティティの立ち現れ方の関係を見る、2) 政府から援助を引き出す際のアイデンティティの利用を見る、3) 彼ら自身の生活世界におけるエスニック・アイデンティティのひとつのコアとして宗教・信仰生活についてみる。また、4) 環境認識・行動様式の変化が誰によってどのようにもたらされたか検討する。

ここで背景情報として、調査時点でイスラ・ベレサのバジャウに介入していた政府機関は、「ダバオ市社会サービス開発局」(City Social Services and Development Office: CSSDO)のみであったことを付け加えておく。内容は成人識字教育と生業への資金援助である。約1,000人の住民に対して経験の浅い2名のソーシャル・ワーカーが配置され、しかも6カ月単位での契約労働者であるため、筆者のみる限り、効果と継続性の点で問題を抱えていた。この時期、地区住民全体を対象としたNGOの介入はなかった。政府にしろ、NGOにしろ、もっぱら経済的な生活水準の改善を目標に介入するため、「バジャウ」がサマ語を話す人々であるという認識すら欠く場合がほとんどで、文化面に対する配慮がある介入はまれであった。

15) 伝統的には核家族。陸地定着化してからは複合家族からなる世帯もみられるようになった。

1. 第1種貝殻・真珠販売業グループ（男子：貝殻・真珠販売業（ホテル）、女子：主婦か非漁業）

発見された事実

(1) 生業活動：ダバオ市においてバジャウであるということは、真珠・貝殻販売業において一種の付加価値を生み、市場を創出する。このとき、出生地のエスニック環境においては「バジャウ」と認知されないようなサマも、ダバオ市では「他者のまなざし」¹⁶⁾の中ではバジャウとして認識されることで、真珠販売において利益を得ることができる。

(2) 対政府：「他者のまなざし」において、イスラ・ベレサのバジャウ住民の一部と認識されているため、政府からバジャウ向け援助があったときには、バジャウとしてグループで利用する。

(3) 宗教・信仰：グループとしてサマの伝統的宗教儀礼を保存し、生活上の困難に対応している。

(4) 変化：世代を通じた異民族間結婚によって、部分的、選択的で緩やかな文化変容を経験した。

事例1：テミイの世帯

ステータス順位は184世帯中第3位。イスラ・ベレサのバジャウ住民のあいだで最も高い社会的経済的地位をもつとされる、いわば裕福な世帯の代表である。このグループは親族6世帯からなり、アリーナ・ピカスに居住している。とくにカンボンという名称は使わない。

世帯主テミイは1961年、南サンボアンガ州サンボアンガ市にあるサマ居住地のひとつリオ・ホンド（Rio Hondo）に生まれた。父親はチャイニーズ、母親は「バジャウ」である。父親は彼の生後まもなく蒸発したため、母親がコーラル・ダイバーとして珊瑚・貝殻を採集、販売することで生計を立てた。1974年、ムスリム分離独立派とフィリピン政府のあいだの緊張が高まり、治安が悪化する中、母親に連れられてダバオ市のイスラ・ベレサに来た。妻アルマはタウスグの父親をもつ「ハーフ・バジャウ」で、やはりリオ・ホンド育ちである。

テミイの世帯は、妻（専業主婦）と8人の息子（すべて就学中）からなる核家族である。現在、テミイはマラナオから仕入れた香港産の真珠のアクセサリやダバオ産の貝殻製の装飾品（トレイやペーパー・ウェイトなど）を売って生計を立てている。市内にある有数のリゾート・ホテルの船着き場で独占的な販売をする許可をもっており、そこで販売する10名の「バジャウ」をとりまとめるのも彼である。国内外の裕福な観光客を相手にした真珠の販売からの収入は日々の変動が大きいだが、毎日10時間ほどの就労を続けることで多いときで月に3万ペソ、少ないと

16) 「他者のまなざし」という言葉は、人類学のうちでも民族について関係論的なアプローチをとる立場から使われるもので、セルフ・アイデンティティは自己以外の存在と対峙してこそ具象化されることをさしている。その意味は、例えば、タイ王国とラオス人民民主主義共和国間の関係と一地域における非タイ系民族との関係において、ラオという民族表象を捉えようとする研究を行った林行夫の次のような一文によく理解される。「個々の地域での具体的な隣人関係、累積されてきたまなざしなど、さまざまに相互を境界づけるまなざしが個々のラオ人社会をつくり、あるいは消え去りつつして新しい指標を与えている。自文化の特異性を表現する演出されたマーカーは、他方で消費主義の時代における一国家への帰属意識を拡充するのに役立つ」[林 1998b: 79]。

きで5千ペソ程度を確保している。¹⁷⁾ タガログ語や外国語が得意であることを活かしてセールス・トークを展開し、客との交渉に積極的なのが彼の商売の特徴である。どちらかといえば色白でバジャウらしくない彼は、妻の縫ったインドネシア・バティック調の衣装をまとい、ミンダナオの少数民族らしさを演出する。

彼らのグループをグループとしてまとめているのは、経済や政治よりもむしろ宗教・社会儀礼における集団的行為であろう。中心となるのはテミイの伯母アティカで、彼女はパンダイ (*panday*) と呼ばれる伝統的な産婆である。祖先から霊力を受け継いだジン (*djin*) でもあり、グループの中で妊娠・出産ばかりでなく病院で治療しきれなかった病人に対して診断や祈祷など必要な援助を行う。病気快癒にともなって行われる祖霊 (*umboh*) を仲立ちとした神 (*Tuhan*) への感謝儀礼 (*pag-hinang ni Tuhan*)、木々や岩に棲んで障りをする精霊 (*saitan*) への供物奉納 (*pag-patulak*) などを取り仕切るのも彼女である。こうしたグループの構成員全員が参加し共食をとまなう宗教儀礼では、実際の祈祷を行うのは男子の長老たちである。テミイの叔父タムシンが中心的役割を担うこともあるが、彼のジンとしての力が十分でない場合や男子割礼 (*pag-islam*)、結婚式や死後100日まで数回行われる喪など重要な社会儀礼には彼の親族から「イマーム」 (*imam*)¹⁸⁾ が呼ばれる。なおサマの伝統的宗教儀礼では世帯単位で行うオンボ (*pag-umboh*) がむしろ日常的であるが、テミイのグループでは年配者の助言がないかぎり行われない。したがって子供たちが参加するのは、親族単位の儀礼のみである。オンボの棲む場所や供物・祈りを捧げる位置などは、伝統的な家屋構造 (一間で片側の壁に窓がないニッパ小屋) と深く関係している。そうした構造をもつものとして、アティカの家屋が意図的に残されている。儀礼を行うときの集会所的な機能を担うと同時に、経済面では個々の独立性が高く、生活様式の非バジャウ化が進んでいる構成員が絆を確認する場を提供している。

政府などからバジャウ向けの援助の話があった場合には、テミイやアルマを中心に親族で相談して対応を決める。テミイとアルマによれば彼らの親族は、自称「サマ」である。前居住地のリオ・ホンドにおいては、言語こそ似通っているものの、陸に定住するサマである彼らと漂泊する「バジャウ」とは、当地で多数派であるムスリムからみて一応別の集団であった。ダバオ市においては、多数派を占めるキリスト教徒・セブアノ語系人口がイスラーム系人口とバジャウとのあいだに歴史的に存在する階層性は無頓着であるため、¹⁹⁾ サマ系住民はイスラーム化し

17) 1999年11月現在、為替レートは1米ドル=約40ペソ、ダバオ市の非農業部門の最低賃金は1日158ペソ。ダバオ市を擁する南ダバオ地方の貧困線 (栄養その他の基礎的ニーズを満たすに必要な所得と定義される) は1997年で1人当たり年間所得10,440ペソ。

18) イマームという名称はイスラームからの借用で必ずしもムスリムのいうところのイマームを意味しない。このグループの場合、他のムスリム集団の影響をより強く受けており、例えばここであげた100日の喪などは他の4グループにはみられない非サマ的な儀礼である。なお、南方系サマについては1970年代以降、急速なイスラーム化が進行したとされるが、ダバオ市のバジャウはイスラームの影響のもとにありつつも自称・他称ともムスリムではない。

19) フィールド・ワークをしたものの実感として、マジョリティからみて単純にマイノリティとしてくく

表7 生業グループ別の属性・

項目	1. 第1種貝殻・真珠販売業	2. 古着販売業
①ステータス順位 (184世帯中)	3	18
②世帯主の移動歴 現住所への転居年 析出地 経路地 出生地を離れた理由	1982(1970) ^c リオ・ホンド オロンガボ 治安の悪化	南サンボアンガ州 マニラ首都圏 経済的困窮
③就業状態と所得 ^a 家族形態 世帯主 配偶者 非就学の子供, その配偶者	核家族 貝殻・真珠販売業5千~3万ペソ/月 主婦 n.a. なし n.a.	複合家族 (もと漁業) n.a. 古着販売業 200ペソ/日 古着販売業 50ペソ/日 各種行商 2,000ペソ/月
④漂泊性の構成員と生業 (場所・期間)	世帯主の母親 物乞い (マニラ・数カ月間)	子供 行商 (ミンダナオ諸都市・1カ月)
⑤栄養摂取と健康 食事の回数/日 主食と入手方法 主な副食と入手方法 その他 頻繁にみられる病気	3回+間食2回 米, キャッサバ 購入 魚, 肉魚, 野菜 購入 果物 購入 とくになし	3回+間食 キャッサバ, 米, ガビ購入 魚, 干物, 野菜 購入 なまこ 採集 とくになし
⑥住居・耐久消費財・船所有 住居構造・部屋数 ^b 屋根材 壁材 床材 耐久消費財所有 船	杭上2階建て家屋3室 鉄板 合板 ココナッツ材 テレビ, ビデオ, カラオケ, 炊飯器, 冷蔵庫, 洗濯機など なし	杭上家屋 1室 ニッパやし 合板 竹 なし なし(親戚にあり)
⑦就学年齢の子供の教育	就学(初等~高等教育)	非就学
⑧グループ内関係 グループとみなす範囲 所得再分配 セーフティネット 規模の経済 独占への集団的対抗 政策実施費用の極小化 政策誘導 宗教・社会儀礼の合同	親族である6世帯 なし あり なし あり あり なし あり	親族である8世帯 あり あり なし なし あり なし あり
⑨グループ間関係 経済的関係 宗教・社会的関係 政治的関係	グループ2とあり 依頼があれば協力 なし	グループ1とあり 結婚式のみ参加 なし
⑩非サマとの関係 経済的関係(調査地外) 経済的関係(調査地内) 政治的関係 その他の社会的関係	操業許可・委託販売契約 近隣関係・講・貸借関係 なし 婚姻	仕入先(現金取引)・顧客(スポット) サリサリ・ストア なし 婚姻, NGOとの接触
⑪セルフ・アイデンティティ 自称 スルー系ムスリムからの他称 対非ムスリムの自称 対顧客・対政府	サマ サマル バジャウ バジャウ	サマ サマル バジャウ バジャウ

出所:「基礎的世帯調査」「社会的不平等調査」「月例家計調査」「口述史調査」「生活時間調査」(表1参照)。

^a 参与観察開始時点, 1999年5月現在。^b 台所を除く部屋数。^c イスラ・ベレサへの転居年。

青山：ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程

一般生活水準・社会関係：5つの世帯

3. 第2種貝殻・真珠販売業	4. ボボ・パラングレ漁業	5. パナ漁業
60	94	184
1984(1968) ^c タリクサンガイ 南サンボアンガ州 (アリーナ・ピカス)	1988 サンガリ 南サンボアンガ州 マルゴス・南サンボアンガ州 サ・トゥビグ ティバンバン 東ダバオ州 治安の悪化 経済的困窮	1996 サンガリ 南サンボアンガ州 マルゴス・南サンボアンガ州 サ・トゥビグ ティバンバン 東ダバオ州 治安の悪化 経済的困窮
治安の悪化 経済的困窮	治安の悪化 経済的困窮	治安の悪化 経済的困窮
複合家族 貝殻・真珠販売業 300ペソ 週 物乞い 15~30ペソ 日 古着販売業 50ペソ 日 貝殻・真珠販売業 300ペソ 週	複合家族 漁業 200~1,000ペソ 操業 古着販売業 50ペソ 日 漁業手伝い 無給	複合家族 物乞い 15~30ペソ 日 物乞い 15~30ペソ 日 (非操業の漁業) n.a. 物乞い 15~30ペソ 日
世帯主・配偶者・子供 行商と物乞い (ミンダナオ諸都市・2週間)	世帯主 漁業 (東ダバオ州・2~4週間)	配偶者・子供 物乞い (ミンダナオ諸都市・2週間)
2回 キャッサバ,米 購入 魚,干物 購入 野菜,果物 施し物 皮膚病	2回 キャッサバ,米 購入 魚,干物 購入 野菜,果物 施し物 風邪,皮膚病	1~2回 キャッサバ,米 購入 干物 購入 魚,野菜,果物 施し物 皮膚病,倦怠感,風邪,栄養失調
杭上家屋 1室 鉄板 合板 ココナッツ材 カラオケ,電気ピアノ なし(親戚にあり)	杭上家屋 1室 ニッパやし やし 竹 なし あり	杭上家屋 1室 やし やし,各種廃材 竹 なし なし(親戚にあり)
非就学(初等教育中退を含む)	非就学	非就学
親族を中心とする18世帯 親族の範囲であるが弱い あるが弱い なし なし あり なし キリスト教への改宗により弱体化	親族を中心とする27世帯 親族の範囲であるが弱い あるが弱い なし なし あり なし あり	親族を中心とする27世帯 親族の範囲であるが弱い あるが弱い なし なし なし なし あるが弱体化
なし 結婚式のみ・依頼があれば協力 なし	なし 結婚式のみ なし	なし 結婚式のみ なし
仕入先(現金取引)・顧客(スポット) サリサリ・ストア なし キリスト教の浸透と改宗	仲買人・仕入先(現金取引)・顧客(スポット) サリサリ・ストア なし なし	仕入先(現金取引)・顧客(スポット) サリサリ・ストア なし なし
サマ バジャウ バジャウ バジャウ	サマ バジャウ バジャウ バジャウ	サマ バジャウ バジャウ バジャウ

たラミヌサ (Laminusa)²⁰⁾ を除き、まとめてバジャウと呼ばれることは避けられない。彼らにしてみれば、アラスカに居住するような「本物のバジャウ」、すなわち「サマ・パラウ」(Sama Pala'u: 船に住むサマ) とみなされることは侮辱であるが、奨学金や政府援助の供与などメリットがあるため甘んじている。テミィがホテルで観光客相手に真珠や貝殻を売るさいには、「スルーの漂海民バジャウが自ら採って売る」というイメージが価格交渉を有利にするので、バジャウというエスニック・アイデンティティを戦略的に利用している。サマというセルフ・アイデンティティよりもバジャウのほうが対政府、対市場では価値があるのである。

このグループの特徴は、サマのアイデンティティを生活世界に残しながら、外部の者に対しては極めて戦略的に「バジャウ」というアイデンティティを使うことで経済的福祉の向上を成し遂げている点である。真珠販売におけるビジネス・スキルや勤勉さ、子供に対する教育への力の入れようは、下位3グループには例をみないものであるが、これはテミィやアルマによれば異民族間結婚が進むにつれ非サマとの接触が増え、自ずから働き方や生活の目標(例えば教育の重視)が変化したためで、援助団体からあれこれいわれた結果ではない。子供たちは、タウスグ語、タガログ語、セブアノ語、英語を話すが、親族の共通語はサマ語であり、とくに自分たちのアイデンティティについて自虐的な表現をすることはない。

2. 古着販売業グループ(男子:貝殻・真珠販売業(ホテル・行商),女子:古着販売業)

発見された事実

(1) 生業活動:貝殻・真珠販売業ではバジャウであることから付加価値を得ている。古着販売業の基礎は、以前住んでいた場所で「バジャウ」として NGO の生業プロジェクトに参加した際に獲得された。

(2) 対政府:グループとしては政府からバジャウ向け援助があったときには積極的に利用する。外部の援助機関に対して「バジャウ」を演出し、援助を引き出そうとする。

(3) 宗教・信仰:親族としてサマの伝統的宗教儀礼を保存し、生活上の困難に対応している。

(4) 変化:ミッション系 NGO の援助プロジェクトによってもたらされたが、伝統的な生業にそった形での介入であり、宗教生活にも中立であったため、部分的で選択的な文化変容を経験した。

↘ られてしまう少数民族や先住民のあいだにも階層が存在することはよくあると思う。それは民族の集団的記憶によることも少なくない。バジャウについては、過去の文献によれば、スルー・ホロ地域にあって、タウスグを頂点に、つぎにイスラーム化して陸地定着しているサマ、最下層に家船に住むサマであるバジャウ(自称はサマ)というエスニック・グループによる階層が存在する [cf. Stone 1962; Nimmo 1972]。

20) シアシ系サマ。言語集団としては「バジャウ」と同系であるが、調査地においては宗教という社会行動様式の違いを強調することで自らと「バジャウ」との弁別を図っている。この他、「バジャウ」であるほかのサマ語集団とくらべて、すでに海岸沿いの杭上家屋で暮らすことをやめていること、学歴が相対的に高いこと、の2点でも異なっている。

事例2：バルスラの世帯

ステータス順位は184世帯中18位。アリーナ・ピカスに住むテミイのグループには及ばないものの、アラスカに居住するバジャウ住民のあいだで最も高い社会経済的地位にあり、生活にゆとりがみられる世帯といえる。このグループは親族8世帯からなる。これをカンボンとよぶ。

世帯主はバルスラ、推定年齢50歳の女性で、1940年代後半スルー州クビガアン島（Kubingaan Island）に生まれた。両親ともにサマ・クビガアン、生業は珊瑚礁内における漁業（pasol: 釣り漁、logo: 籠漁、および貝・海草などの採集活動）であった。1972年マルコス政権の戒厳令発令の頃、内戦の激化にともない、タウスグなどムスリム系難民が周辺他島からクビガアンに流入、同時に「ホロアノ」によるサマ・クビガアンに対する海賊行為が頻発するようになった。サマ・クビガアンの多くが押し出される形で流出し、すでに既婚であったバルスラも夫ジャニの親族を頼ってホロ島（Jolo Island）ボスボス（Busbus）に一家をあげて移住した。そこで70年代後半、国際 NGO が「バジャウ」のための援助活動を展開するようになり、教育と生計を中心にさまざまなプロジェクトが運営された。これにともないジャニは商業的なサメ漁、バルスラは NGO の工場でのマット織りに就き、幼い子供たちは就学した。地元の「バジャウ」の生活は向上・安定する方向にあったが、1997年、指導者であった神父がタウスグに殺害され、NGO の活動は事実上終焉した。治安の改善がみられず、海上での海賊行為も頻発したため、バルスラ一家は生活苦からダバオ市に転居した。

バルスラの同居家族は、夫と4人の娘、娘婿2人、孫3人である。住民登録などにおいて世帯主はバルスラである。バルスラは女性であるが、主たる家計支持者であると同時に、世帯内の意思決定に強い権限をもつ。現在、バルスラは地元でウカイ・ウカイと呼ばれる古着の行商で一家を支えている。4人の娘のうち、未婚のふたりはバルスラの販売援助として、既婚のひとは独立会計で古着の行商に従事している。行商は朝夕2回公設市場で行うのが日課であり、日中の空き時間にはイスラ・ベレサ内の隣接地区を回る。バルスラの商売のやり方は「常に頭を使って」売れるように工夫することである。例えば古着を染め直したり、仕立て直したり、売れ筋商品を考える。こうした女子の積極的な就業は NGO 時代に身につけたことである。バルスラとふたりの娘はこれで1日200ペソほどの利益を上げ、既婚の娘も50ペソほど稼ぐ。もうひとりの既婚の娘はアラスカ内に小さな屋台を毎日出してスナックを売り、やはり50ペソ程度の日収がある。一方、夫のジャニ、婿2人はさほど生産的な就業状態にない。ダバオ市にあってはバジャウの漁師を対象とした積極的な資本供与やサメの仲買人がいないため、ホロのようにはいかない。現在の漁撈活動といえば海岸でナマコを採っておかずに添える程度である。娘婿2人はかつて NGO の援助でトライシカッド²¹⁾ 運転手として家計に貢献していたが、やはりダ

21) フィリピンに広くみられる公共輸送機関の一種で、自転車の横に2～3人掛けの椅子のある車両を取り付けた、いわゆる輪タクのこと。トライシカッドはダバオ市内での呼び名で、マニラではペディ・

バオ市に来てからは半ば失業状態である。バルスラは金銭的余裕があるおりに貯蓄を心がけているので時折彼らに資本が供与され、タバコや真珠の行商を行うことある。

宗教・社会儀礼においても中心はバルスラである。彼女はパンダイかつジンであり、親族における妊娠・出産の援助のほか、病人に対して診断や祈祷などを行う。木材家屋に住むが構造は伝統的で、一面には窓がなく、オンボのためにニッパが壁に貼られている。バルスラのグループは神 (*Tuhan*) の存在を信じる。ほかの住民同様にイスラームの影響がみられるが、イスラーム教徒ではなく、*Tuhan* を Allah とはよばない。ただし、儀礼の規模は縮小した。バルスラやジャニの親の世代では、サマの伝統的宗教・社会儀礼が世帯単位の小規模なものから親族、隣人が居住地全体あるいはそれを超えて関わる大規模なものまで行われていた。現在観察できる社会的な儀礼はグループ内の親族で行う先祖供養のための共食儀礼 (*pakan sumangat*) のみである。

バルスラとジャニによれば、彼らは自称「サマ・クビガアン」であった。ホロに移住した後には、NGO から「バジャウ」と呼ばれたこともあり、「バジャウ」という他称に甘んじるようになった。祖先に船上生活者がいた記憶はなく、「本物のバジャウ」(サマ・パラウ) とはあくまでも別の集団であると自認する。アラスカにおいてもサマ・パラウだった他のグループとは違うと思っているが、その程度はテミィのグループによる認識ほどではない。「少し言葉が違う」という程度であり、外部からまとめて「バジャウ」と呼ばれることに対する抵抗はあまりない。とくに政府援助などがある際には、積極的にこの他称に応じるほどである。

このグループの特徴は、サマのアイデンティティを生活様式から宗教まで生活世界に残しながら、勤労観においては徹底的に市場志向になっており、長期的な視点から商売を行うことである。こうした価値観やビジネス・スキルは、NGO によって外部からもたらされた。働ける者はすべて働いているだけでなく、世帯内におけるコーディネーションが優れているため資金・資源の効率的配分が実現し、同じような古着や真珠の行商に従事している下位グループよりも高い経済的福祉の向上を実現している。しかし、「毎日3食食べられ、病気になったら薬が買える」程度の生活水準であって、もし非バジャウ人口の一般的生活水準と比較するならば貧困であることにはかわりない。ここから抜け出るためには、労働市場への参加能力を高めるための投資(教育など)が必要であるが、NGO プロジェクトが頓挫して以来、次世代への教育は資金不足から放棄されてしまった。

↘ キャブと呼ばれている。

3. 第2種貝殻・真珠販売業グループ（男子：貝殻・真珠販売業（対貨物船・行商）、女子：主婦か古着販売業）

発見された事実

(1) 生業活動：「海の民バジャウ」のイメージは、海岸線で貨物船相手に貝殻・真珠をバンカ (bangka)²²⁾ で販売したり、バーター取引したりして貝殻・真珠販売業を営むこのグループによって強化される。所得の不足を補うため、女子や子供が物乞いを行うがこれは現金よりも市場（いちば）における生鮮食品の採集を目的とする。ときに物乞いとしてミンダナオ島内の都市を周遊することで生活を成り立たせている。このさい、貧しく哀れみを請う「バジャウ」としてアイデンティティを表現する。

(2) 対政府：グループとしてはキリスト教化にともない外部に対する政治力を増し、政府との交渉は教会を介して組織的に「バジャウ」としてなされる。このさい、「他者のまなざし」において「本物のバジャウ」、その代表を演出し、援助などの政策を誘導する。

(3) 宗教・信仰：バプティスト系キリスト教への改宗が進行中だか、伝統的社会儀礼を残す。キリスト教化していない者については土着信仰に基づく伝統的医療などのサポート・システムがあり、生活上の困難に対応している。

(4) 変化：キリスト教会系 NGO の援助プロジェクトによってもたらされたが、改宗が条件づけられ、クリスチャン・フィリピーノの生活様式がモデルとして提示されたため、全体的でより急激な文化変容を経験しつつある。

事例3：パパ・マナンバヒの世帯

ステータス順位は184世帯中60位。アラスカに居住するバジャウ住民のあいだではどちらかといえば暮らし向きのよい世帯とみなされる。このグループは自らをカンボンとよび、近隣に住む親族など18世帯からなる。

世帯主はパパ・マナンバヒ（以下パパ）、推定年齢60歳の男性である。両親の出生地は不明であるが、先祖代々、船上生活者（サマ・パラウ）であった。パパ自身も家船で生まれ育ったが、1940年代末～50年代初め頃には船上生活をやめ、南サンボアンガ州サンボアンガ市タルクサンガイ (Talucsangay) の杭上家屋集落に暮らすようになった。当時の生業は伝統的なバナ漁であった。1960年代末期、次第に治安が悪化し、近海でホロアノの海賊行為が勃発するようになったため、戒厳令の発令をまたずにサンボアンガ市から流出、漂泊のうちに見つけたダバオ市のイスラ・ベレサに定着した。

22) セブアノ語で小船をさす一般的用語。通常、長さ5メートルから15メートルほどの大きさで、アウトリガー（舷外浮材。多くは竹製）がある場合とない場合がある。言葉の定義においてエンジンは含まないが、エンジンの取り付けは自在で、取り付けられた場合にはパンプ・ボードと呼ばれる。

パパの同居家族は、妻と末娘、その婿、孫5人である。幼い孫を除いて全員が何らかの生業をもつが、そのいずれも機会的で小規模な所得源にすぎず、主たる家計支持者は限定できない。パパは自称は貝殻・真珠販売業だが実際は恒常的な物乞いで、妻のカルミヤとともに毎月2週間ほど近隣諸都市に物乞いツアーにでる。この際、10代に達した孫娘1人をともなうことがある。2週間で自宅にもちかえる現金収入は200~500ペソほどである。娘のヴィルマはダバオ市内の公設市場で古着販売業（行商）をしているが、日銭は30~50ペソにすぎず、家計を支えきれない。そのため、行商の傍ら機会的に物乞いをし、野菜や果物をもらってくる。娘婿のカピリンは真珠・貝殻販売業（対貨物船・行商）であるが、さほど生産的とはいえ週に1回200~300ペソの売り上げがあればましである。一家に共通しているのは物乞いであれ行商であれ、決して相手や客に積極的に働きかけず、受け身でいるという点である。パパやカピリンは、サンボアンガ時代にはバナ漁、イスラ・ベレサではビサヤ系の魚仲買人のもとダイナマイト漁で生計を立てていた。ダイナマイト漁の衰退（1980年代半ば）とともに、バジャウを対象とする資本供給や仲買をする非サマがいなくなったため、パパらも実質的に漁業を放棄した。以後、安定的に食べることができなくなり、複数の生業で家計を支えていくことになった。パパ、カルミヤ、カピリンの3人の生業に関わる短期の移動は頻繁であり、1~2週間単位の移動が毎月1回は観察される。ときとして比較的自立した子供（8歳以上程度）をともなう。移動は、同一都市滞在型の場合と複数都市周遊型の場合があるが、いずれにしても行き先はミンダナオ島内の諸都市である。とくに北アグサン州ブトゥアン市、東ミサミス州カガヤン・デ・オロ市はひとつの停泊地となっている。これらの都市は、北方系サマが多く係留・定着する場所である。

パパ・マナンバヒはグループの長老的立場にあり、約半数の10世帯がキリスト教化した現在でも結婚式などの社会儀礼で先導者を務める。ジンであり、キリスト教化していない者に対して伝統的医療を行う。キリスト教に改宗した者は伝統的宗教オンボを禁止されているが、その機能的喪失はヒーリング・セッションに出席したり、教会の援助で病院に行くことで代替されている。パパの同居家族はキリスト教徒化していないため教会から直接的な金銭的援助は受けられないが、教会が積極的に行う援助の陳情活動などに便乗し、政府やNGOからの援助を「バジャウ」として受けている。教会から請われれば、教会によって誘導された政府やNGOからの援助の申し出に対して、アラスカ地区「バジャウ」全体の長を名乗る。

パパとカルミヤの世代は船上生活経験者であり、「サマ・パラウ」であった。出生地からいえば「サマ・サンボアンガ」である。娘たちの世代はすでに陸上家屋に暮らしているから「サマ・ルマ」(Sama Luma)²³⁾、アラスカで育ったという点では「サマ・ダバオ」ともいえる。アラスカ内ではマルゴス・サ・トゥビグやサンガリ、あるいはホロヤシアシから来たグループとは

23) “luma” はサマ語で家をさす。

多少言葉が異なるが方言の範囲であり、ダバオ市においては「バジャウ」と呼ばれる者であるという意味では我々意識をもっている。ときとして他者に対してムスリムの呼称を流用したり、イスラーム化したサマであると自称したりする上位2グループとは異なり、パパのグループは対ムスリムの自称もサマである。

このグループのキリスト教への改宗は、世帯単位で進行中であり、多くの場合きっかけは生死に関わる病気やけがをしたさいに貧困から医療費が払えないところを教会が肩代わりしてくれた結果回復した、というものである。こうした改宗の動機に彼らの選択の余地があったかと問われれば疑問も残ろう。改宗とともに、セブアノ（彼らにとってのフィリピン・キリスト教徒のイメージ）をモデルとした生活様式・価値観が導入され、浸透しつつある。いったんキリスト教徒化すると援助が豊富に与えられて速やかに経済的福祉が改善するためか、伝統的宗教を実践したり、パナ漁や物乞いで細々と暮らしを立てる下位グループのような「バジャウ」のイメージを恥とするようになる。そのため、まだキリスト教化しておらず経済的に苦しいパパの世帯にあっては他者に対して自虐的にアイデンティティを語る傾向がある。

4. ボボ・パラングレ漁業グループ（男子：漁業（ボボ・パラングレ）、女子：古着販売業・物乞い）

発見された事実

- (1) 生業活動：男子はセブアノ系魚商人・仲買人と借入関係を結ぶことで伝統的生業である漁業をダバオ市外の漁場まで出漁しながら維持。一方、女子は所得の不足を補うためにダバオ市内の公設市場で古着販売業・物乞いをする。借入や物乞いのさいに、貧しく哀れみを請う「バジャウ」としてアイデンティティが作用している。
- (2) 対政府：カンポンを形成して集住するものの、政策誘導は行わず、むしろ集団的に介入を拒否することがある。
- (3) 宗教・信仰：個人・世帯レベルを包括してカンポンが儀礼を行う集団として機能しており、伝統的な価値観の維持・再生をするとともに、生活上の困難に対応している。
- (4) 変化：環境認識は彼ら自身によるセブアノ系漁民との接触によって生じたので、部分的・選択的でより緩やかな文化変容を経験した。

事例4：カルマンの世帯

ステータス順位は184世帯中94位。アラスカに居住するバジャウ住民のあいだでは平均的な社会経済的地位の世帯であるが、中位だからといって暮らしぶりがまあまあという評価を受けているわけではない。むしろ「普通のバジャウらしく貧しい」という表現をされる。このグループは、近隣に住む親族など27世帯からなり、それを「カンポン」とよぶ。

世帯主はカルマン、推定年齢32歳の男性である。両親の出生地は不明であるが、陸に家をもたない船上生活者ではなかったという。カルマン自身はサンボアンガ市郊外沿岸部のサンガリ(Sangali)で生まれ育った。父親の生業は珊瑚礁内でのパラングレ漁とパナ漁であり、母親や子供たちは漁に同伴して手伝ったり、海岸で貝やウニの採集をしていた。1983~84年頃、近海でホロアノの海賊行為が頻発するようになったため、南サンボアンガ州東部、ドゥマキラス湾に面するマルゴス・サ・トゥビグ(Margos sa Tubig)を經由して、東ダバオ州西岸に位置するティバンバン(Tibanban)に転居した。生業はダバオ湾における漁撈であるが、パラングレ漁とパナ漁のほか、平らで岩の多い漁場の特性にあわせてボボ漁を行うようになった。これは新しい漁法ではなく、妻の父親から伝授されたものである。1988~89年頃には、ダバオ市イスラ・ベレサにさらに転居し、現在に至っている。転居の理由は経済的困窮であった。

カルマンの同居家族は、妻と子供4人(息子3人、娘1人)、義母および義妹である。主たる家計支持者は名目上は世帯主で漁業を営むカルマンとされるが、実質的には古着販売業(行商)兼、機会的な物乞いをしている妻マリサと義妹ヴァルマリアである。カルマンの漁法はボボとパラングレで、漁場はダバオ市から船で4時間ほど離れた東ダバオ州ルポン付近のティバンバンである。長さ23フィート、16馬力のシングル・アウトリガー付きの自家用漁船で月に1回2週間ほど出漁して、イスラ・ベレサの自宅に持ち帰る純利益は多くて300ペソである。漁業所得だけでは家計を到底支えきれないため、マリサとヴァルマリアは毎日朝晩2回ダバオ市内の公設市場で古着の行商をし、日銭50ペソ程度と果物などの施し物をえている。カルマンの世帯は一見、漁業を生業とする伝統的なサマに見えるが、男子だけの出漁、女子の外部就業などは親の世代にはなかったことである。

このグループについては、漁業に関してダバオ市内公設市場の鮮魚部門にセブアノ語系キリスト教徒のお得意(いわゆるスキ)がいることが大きな特徴である。例えばカルマンはダバオ市から出漁するおりのガソリン代や漁具を新しく作るさいの材料費として、200~300ペソの現金を借りることができる。反対給付としてスキはカルマンから独占的に魚を買い付けることができ、負債はその代金から差し引かれるという。出漁先のティバンバン付近にも同様にセブアノ系キリスト教徒のスキがいるが、こちらは魚仲買人である。カルマンはこの2人を“financier”とよぶ。スキとの交換関係は漁業活動に関する経済的交換に限られており、とくにパトロン・クライアント的な関係にはなっていないが、このスキの存在がカルマンをして漁業継続を可能にしている大きな要因と考えられる。アラスカのバジャウの大半はこのような資本供給者かつ商人として市場とのリンケージを果たす非サマの仲介者との関係をもたない。しかし、カルマンがいうような「スキ関係」は、ダバオ市におけるセブアノ語系キリスト教徒の魚販売人への聞き取り調査によると、セブアノ側には経済的な取引動機は弱い。商業漁船をもつタウスグヤセブアノと毎日300キロ程度の魚を取引する彼らにとって、月に1、2回、せいぜい5キロ程度

の魚を持ち込むだけのバジャウは商売上、継続的で不可欠な供給者にはなっていないのである。²⁴⁾

カルマンとマリサが考えるカンポンの範囲は、5グループ中最大で、近隣に住む親族など27世帯が含まれる。彼らはグループ内結婚を好むが、その主な理由は、1) 相互理解がたやすいこと、2) 結婚後も助け合いが期待できること、にあるという。助け合いの範囲を維持・拡大するために、カンポンを形成する世帯数は多いほうがよいと考えている。ただし現実には、世帯間における所得の再分配はほとんどみられない。病人がでた場合には、カルマンやマリサの兄弟姉妹とその家族であればカルマンの家屋に一時的に世帯ごと身を寄せることになり、医療費などの援助が行われるが、そのさいにも、同居する複数の世帯の運営は基本的に独立、すなわち別々に稼ぎ、別々に料理して食べるのが通常であるから、決して包括的なセーフティネットではない。一方、精神面でのサポート機能は大きく、グループ内で共通のバンダイかつジンであるマリサの母親アミサニヤによる診断や祈祷が同居した病人に対して与えられる。カルマンの家屋は伝統的な宗教行為にふさわしい構造（一間構造、片方の壁に窓なし、ニッパ小屋）をもち、家屋であると同時に儀礼を行う集会所としての機能をもつのである。ひとつの証左として、屋根には神の加護を願うための白旗が掲げられている。親族のうちでもこの種の旗を保有するのはカルマンの世帯と、もうひとりのジンであるマリサの長兄の世帯だけである。宗教的行為の多くは同居家族やせいぜい近親者の範囲（カルマンとマリサの兄弟姉妹）にとどまることが多いが、病気快癒感謝の儀礼（*pag-hinang ni Tuhan*）などには遠縁者も含めたカンポン全体が共食する社会儀礼となる。こうして宗教面では結びつきが強いカンポンであるが、経済面や政治面ではリーダーは特定できない。ただし生業が共通であるので、漁のチームを柔軟に組んだり、²⁵⁾ また出漁中に出会った場合には操業の助け合いこそしないものの海岸で一緒に炊事をすることはあるという。外部に対する政治的機能であるが、カルマンとマリサは警戒心が強く、政府や NGO からの援助の申し出があっても容易に受け入れない。むしろ集団防衛的機能を発揮しているように見える。

カルマンとマリサは先祖に陸上家屋をもたない完全な船上生活者はいなかったはずだから、自分たちは「サマ・パラウ」ではないという。出生地からいえば第5のグループと同じ「サマ・サンガリ」あるいは「サマ・マルゴス」とでもいいようがあるが、船上生活者であった彼らと自分たちでは明らかにグループが異なると主張する。ただし言語的にはほとんど同じである。また、ダバオ市においては「バジャウ」と呼ばれる者であるという意味では他のすべてのグループと我々意識をもっている。非サマの諸集団に対しては「バジャウ」と自称しているが、ムス

24) もうひとつの漁場である東ダバオ州においては今回調査できなかったのですが、当地の漁業流通構造におけるバジャウの貢献の程度はわからないが、カルマンの持ち帰る収益から換算して取引量が小さいことと、取引頻度が不定であることは確かである。

25) 通常、2～3人一組で単独漁船で出漁する。父親と子供、あるいは兄弟、妻の兄弟などと組む。

リム諸集団に対してはサマの自称も用いる。上位3グループとは異なり、はっきりとイスラーム教徒ではない、自分たちには自分たちの神と宗教があるという点が際だっている。

このグループの特徴は、サマのアイデンティティを生業、生活様式から宗教までを残す一方で、漁業低迷による窮乏化からやむを得ず女子の就業・物乞いなど経済生活における変化が生じている点である。外部との接触にはむしろ消極的・選択的で、この意味で変化は内部から生じているといえるが、そのために上位グループが認識しているような経済的機会や援助主体の存在を知らず、選択の範囲が狭くなっている。所得の低さから、この「主体性」を今後どこまで維持できるかについては疑問が残る。

5. パナ漁業グループ（男子：漁業（パナ）、女子：物乞い）

発見された事実

(1) 生業活動：男子は伝統的生業であったパナ漁をダバオ市で継続することに実質的に失敗。ほかのバジャウにならって「他者のまなざし」を利用する新たな「バジャウのニッチ」、真珠販売業に移行する兆しがある。女子は、伝統的な採集活動の場を珊瑚礁空間から公設市場にかえ、物乞いに従事。男女ともに漂泊性を残し、しばしば行商・物乞いのためにミンダナオ島内の都市を周遊して生活を成り立たせている。アイデンティティは、他者の哀れみを請うために使われる。

(2) 対政府：カンポンを形成して集住するものの、漂泊時代同様に世帯間の結びつきはゆるく、外部に対して積極的な政策誘導も政策受容も行わない。

(3) 宗教・信仰：カンポンの儀礼を行う集団としての機能は弱い。経済的困窮から世帯レベルの宗教的行為にも喪失がみられ、キリスト教に改宗したグループ（事例3）へおなじサマとして追従する兆しがある。

(4) 変化：貧困から文化体系が維持できなくなっている。非サマとの接触が少ないため、環境認識の変化が十分でなく、以前と同じような採集活動の延長上としての経済活動（物乞い）をなしている。

事例5：マグサハヤの世帯

ステータス順位は184世帯中最下位。イスラ・ベレサに居住するバジャウ住民のあいだで社会的・経済的に最も貧しい地位にある世帯である。他のグループからみてもとくに生活が苦しそうな状況にある。このグループは近隣に住む親族など27世帯からなり、これをカンポンとよぶ。

世帯主はマグサハヤ、推定年齢40歳の女性である。両親の出生地は不明であるが、陸上に家をもたず船で暮らす船上生活者であった。マグサハヤ自身も両親とともに幼少時代を船上で過ごした。主な停泊地は南サンボアンガ州サンガリであり、問われればここが出生地である。両親

親の生業は珊瑚礁内での漁撈活動で、父親がパナ漁をし、家船ごと同伴する母親や子供たちは父親を手伝ったり、海岸で貝、ウニ、ナマコなどの採集をしていた。マグサハヤもよく海に潜ったことを憶えている。1980年代前半、近海でホロアノの海賊行為が頻発するようになったため、南サンボアンガ州東部のマルゴス・サ・トゥビグに移住した。マグサハヤはすでに結婚しており、両親も彼女自身も海上生活は危険なので家船暮らしはやめて陸上に杭上家屋をもつようになった。マルゴスでは珊瑚礁内における赤潮の被害が深刻だったため、海岸での採集活動は控えるようになり、またパナ漁もふるわなくなった。マルゴス時代はそれでも資本の貸付や魚の仲買をするホロアノのハッジ (hadji) が存在したため、マグサハヤのグループも男子が珊瑚礁を越えて沿海でパラングレ漁をすることで生計は立っていた。やがてこのハッジが死去したことで仲買人はいなくなり、同時にマルゴス沿海にも海賊行為がみられるようになったため、90年代には東ダバオ州ティバンバンを經由し、96年頃にダバオ市イスラ・ベレサの現住所に定着した。

マグサハヤの同居家族は、夫と未婚の子供2人（息子1人、娘1人）、出産時の出血で死亡した長女の婿とその子供4人、未亡人となった姉2人である。主たる家計支持者は特定できない。夫のアナッド（推定年齢60歳）は名目上漁師であるが、船もなく漁にもせず、実際には物乞いである。娘婿のバシレも漁師を名乗るものの、アラスカに来てからは一度も出漁したことがない。参与観察開始時点（1999年5月）においてバシレは物乞いもしておらず完全な失業状態であったが、その後、上位グループの男子をまねて真珠の行商を試行的に行うようになった。しかし資本力も販売スキルもなく、極めて小規模かつ受け身的な行商を展開しており、収入があるのかわからないほど零細である。食べていくために女子と子供は全面的に物乞いに従事している。朝晩、公設市場に出向いていくつかのサブ・グループにわかれて物乞いをして、現金（1日15～30ペソ／サブ・グループ）と食糧をもらってくるのである。以前よりも生活は苦しいという。

マグサハヤの世帯には、定着性のメンバーと漂泊性のメンバーが混在する。ときによって定着性のメンバーと漂泊性のメンバーは入れ替わるので、ほぼ全員が半定着（半漂泊）性であるといってもよい。漂泊といってもやみくもではなく、ホーム・ベースはあくまでも住居を構えるダバオ市であり、移動の範囲はミンダナオ島内の主要都市（コタバト市、ブトゥアン市、カガヤン・デ・オロ市、スリガオ市）に限られる。メンバーの組み合わせは、1) マグサハヤを含む女子と子供（計5～9人）、2) バシレとカンポン内の他の男子（計2～3人）、のふたつのパターンがある。目的は、前者は物乞い、後者は名目上真珠行商であるが機会的な物乞いも含まれる。行き先となる都市の特徴は、路上での物乞いに関する取り締まりがダバオ市よりも緩やかであることと、バジャウを含めた物乞いの数がダバオ市よりも少ないこと、だという。1回のツアーは1～2週間で、少なくとも月1度は上記どちらかの組が漂泊する。船にかわって漂

泊を可能にしている現代の交通機関はバスで、夜間に利用し割引を請う。このさい、バジャウであることは哀れみの対象となるので有利である。

マグサハヤとアナッドが考えるカンポンの範囲は、カルマンのグループ同様にアラスカ地区で最大級で、近隣に住む親族など27世帯が含まれる。しかし、マグサハヤのグループにおいてはより漂泊性が高いため、カンポンの構成員は移ろいやすく、その社会経済的・政治的機能はかなり限られる。世帯間での所得再分配やセーフティネットの相互供与はほとんどみられない。みられるのは、乳幼児に対する食糧の分け与え程度である。また病人がでた場合、直接的な援助が行われるのは近親者（マグサハヤとアナッドの兄弟姉妹とその家族）までである。カンポンの宗教面での機能もこのグループでは弱体化しており、かつてみられたというカンボンぐるみの宗教・共食儀礼は今日ではまれである。数人のジンやパンダイは確認できるが、世帯を超えた社会儀礼で機能する場面はほとんど観察できなかった。危機に瀕したときに世帯単位で行う宗教的行為（オンボ）はかろうじて残っているが、最近では「効き目がない。供物を買うお金がない」といってあまり行わない。外部からの援助はほとんどない。これは立地条件からみて外部者が入りにくいことに加え、マグサハヤのグループ自ら政策誘導することがなく全くの受け身であるためである。それでもダバオ市政府がこの地区の一律援助で生業資金貸付を持ち込んだことがあった。第2グループ、第3グループが経験したようなNGOのプロジェクトと異なり、教育・健康や勤労観形成、マーケティング、あるいはコミュニティ・ディヴェロップメントなどの面には配慮しない、事業ローンのみのプログラムである。政府側がバジャウ内にある生活水準や援助政策受容能力の格差を知らず、また十分な通訳もなかったため、マイクロ・クレジットのスキームがこのグループには全く理解できなかった。結局、無償援助ではなく借金であるならばもし返済できなかつたら罰があたるという噂がたち、²⁶⁾ 立ち消えとなった。

マグサハヤのグループは、他のグループとあまり交流はない。社会・宗教面では結婚式だけが公式の社交の場である。しかし筆者の調査終了直前の時期（1999年11月）に、体調不調のマグサハヤがアラスカ内にあるバジャウ・クリスチャン教会のヒーリング・セッションに参加し始めた。この教会は事例3で言及したようにバプティスト系の団体である。続いて慢性喘息を患うマグサハヤの弟がこの教会に預けられて治療行為を受けるようになった。これは、経済的困窮の結果、世帯内やカンボン内の資源だけではやっていけなくなったため、それを超えて他のグループと個人的に結びつくことで、サマだからこそ「仲間」としてアクセス可能な資源を利用して生き残りを図ろうとするひとつの顕れといえよう。

マグサハヤとアナッドは先祖代々漁撈活動を生業とする船上生活者である、いわゆる「サマ・

26) 具体的には、「返済できなかつたら蛇に食べられてしまう」という表現がなされた。筆者の理解では、これは債権者（政府、セブアノと理解されている）によって直接罰せられることに対する恐怖というよりも、神（*Tuhan*）が行いを見ているから、という文脈で語られることのほうが多かったように思われる。

パラウ」と呼ばれるグループの系譜にある。出生地だけからいえば、事例4と出自を同じにするようにみえるが、言語はともかく生活様式の点で異なるグループとされるべきだという。このグループは出生地において、ムスリムから「サマ・ルワアン」(Sama Luwaan)²⁷⁾呼ばれ、サマの中でも最も蔑視されてきた。この蔑称はダバオ市ではあまり用いられないが、タウスグなどホロ・スルー出身のムスリムの中ではいまも生きている。マグサハヤのグループはダバオ市に限らず他のどの都市においても「バジャウ」と呼ばれるという意味で、「バジャウ」と呼ばれるすべてのサマと我々意識をもっている。非イスラーム教徒であり、ムスリムに対してはサマ、キリスト教徒一般人に対してはバジャウを自称する。貧しさの自覚から、自虐的自己表現がとられることも多い。

このグループの特徴は、経済的困窮から、伝統的な各種儀礼が行われなくなったり、世帯内の調整がないまま構成員がばらばらに漂泊するなど生活様式の崩壊が生じていることである。十分な栄養がとれないために健康状態が悪く、こちらから尋ねれば慢性の頭痛、疲労、飢餓感を訴えるメンバーが多い。そのためか、強いストレスと無気力感に襲われており、労働時間の短さの原因のひとつはここにあると思われる。彼ら自身に尋ねれば、自分たちは最大限働いている働き者だという。行商であれ物乞いであれ、その日足るだけの食糧確保のために歩き回ること＝勤勉という考えのまま、以前と同じような採集を中心とする経済活動を続けている。

V お わ り に

表8は、事例分析の結果に基づいて、経済的福祉の異なる生業グループ別に、1) エスニック・アイデンティティの立ち現れ方と使い方、2) 変化をもたらした主体についてまとめたものである。

翻って本稿の目的は、今日にあっては辺境地域まで押し寄せる市場経済化とライフスタイルの西欧志向化のもとで、変化への適応能力に劣る人々としての先住民が、経済的福祉の向上と選択の自由としてのエスニック・アイデンティティを両立するための条件を探ることであった。ダバオ市におけるバジャウの場合には、事例分析の結果が示すように、経済的福祉の向上は必ず文化変容をとともなうが、それは直ちにサマとしてのアイデンティティの喪失にはつながらない。むしろ経済力をつけることで自分たちらしさをどこに残すか自己選択できる余地が生まれる。他方、経済的福祉の向上がみられない、あるいは低下している場合の文化変容は、半ば強制的な同化、文化剥奪やアイデンティティの自虐的表現につながりやすい。物乞いをする彼らが自称し、また他称される「バジャウ」という名前は、もはやスルーの漂海民という古典的イメージからさえ離れて、「都市をさまよう貧しい先住民」と同義に思われる。飢えている者に食

27) “luwaan”とは *cuspidor*, すなわち痰壺のことであるから、「唾を吐くべき対象」という意味の蔑称となる。

表8 都市経済適応過程におけるエスニック・アイデンティティの立ち現れ方と使い方・変化をもたらした主体

		← 経済的福祉 →				
		高い	事例2	事例3	事例4	低い
		事例1				事例5
		第1種貝殻・真珠販売業	古着販売業	第2種貝殻・真珠販売業	ボボ・パラングレ漁業	バナ漁業
認識の変化をもたらした主体（内部者・外部者） 具体的なプロセス		内部者 異民族間 結婚	外部者 NGO (宗教に中立)	外部者 NGO (改宗を条件)	(内部者) 漁業を通じて 非サマと 接触	
エスニック・アイデンティティの立ち現れ方	使 い 方					
1. 「他者のまなざし」における「バジャウ」らしさの利用						
(1) 貝殻・真珠の販売	商品の付加価値創出	○	○	○		△ ^a
(2) 政策誘導機能（奨学金、生業資金貸付など）	援助対象としてアピール	○	○	○		
(3) バジャウ地区への集住	集団的防衛		○	○	○	○
(4) 物乞い	哀れみを請う（自虐的表現）			○	○	○
(5) 漁業操業のための借入	哀れみを請う（自虐的表現）				○	
2. 生業におけるセルフ・アイデンティティとしてのサマ						
(1) 漁業	伝統的生業の延長				○	△ ^c
(2) 公設市場における採集活動としての物乞い	伝統的生業の延長			○	○	○
(3) ダバオ市外における都市間漂泊型採集活動としての物乞い	伝統的生業の延長			○		○
3. グループ別にみた生活上の諸問題に対応するための資源としてのサマであること						
(1) 伝統的宗教・信仰行為（家族レベル）	心身のサポート	○	○	△ ^b	○	△ ^c
(2) 伝統的宗教・信仰行為（親族レベル）	心身のサポート	○	○		○	
(3) カンボン（グループ）による集団的防衛	侵入者の阻止	○	○	○	○	
(4) カンボンによる乳幼児のためのセーフティネット	乳幼児の飢餓防止・軽減	○	○	○	○	○
(5) 他のバジャウ・グループのもつ資源の直接的利用	疾病時のセーフティ・ネット					○

注：○：該当，△^a：試行過程段階，△^b：キリスト教による代替が進行中，△^c：経済的困窮から弱体化

内部者：彼ら自身，外部者：彼らと異なった文化を背景とする者。

べ物を選ぶ余裕がないように、経済力のない者に主体性の維持は難しいであろう。

ここで、バジャウ（サマ）がエスニック・アイデンティティに自律的な選択の余地を持ち続けるためには最低生活を維持するための所得の獲得が必要条件であるが、これを達成するには単なる生存維持水準を超えた経済活動を非サマとの関係のなかで継続的に行わなくてはならない。そのためには、事例1、事例2が示すように、1) 生存維持水準の経済活動から商業的非漁業を含むより所得の高い経済活動への転換、そのための、2) ビジネス・スキル（販売品・資金の継続的調達、マーケティング、長期的取引関係の形成と信頼、事業計画など）、および、3) 知識（学校教育、地域共通語、非サマの行動様式など）の獲得、が必要である。大胆にいうならば、以前の価値観のうち、「非サマとできるだけ関わらない」「その日足るだけの食糧を確保できればよい（余剰をもたない）」「現在のことしか考えない」という部分は、今日の市場経済のあり方からいえば変わらざるをえないであろう。

いっぽうで、サマの文化のうち、どの部分が残されるべきであるか、という問題がある。無論、これは彼ら自身が決定すべき問題なのであるが、本稿の事例からとりあえず、経済的福祉の上昇にもかかわらず変化しなかった文化要素を指摘しておきたい。それは、海との関わりと言語である。海との関わりは、海岸沿いの杭上家屋への居住、そこにおける伝統的宗教の維持、非漁業の海岸における展開（貝殻・真珠販売業）にみられ、言語は複数言語使用が進んだ段階でもサマ語が維持されていることが明らかである。このふたつは、少なくとも現時点で彼らのアイデンティティの核として残っている要素といえると思う。

ところで、市場参加に必要なスキル、知識の獲得の契機であるが、これは事例の示すところによれば非サマとの接触による情報の伝達とそれによる新しいメンタル・モデルの形成によって生じる。経済的福祉の向上とエスニック・アイデンティティの維持を両立するためには、こうした情報の伝達が、おそらく同じサマかサマの文化を理解している主体を介して伝達されたほうがよい。例えば最貧困グループ（事例5）では、政府援助には反応せずとも、改宗したり非漁業に転換したりした他のバジャウには追従することから、彼らの文化になじむよう翻訳された情報であれば、受容の可能性は高まるのではないと思われる。異民族間結婚や NGO との接触（事例1、事例2）が示すように、そうした主体はサマであってもなくても、文化の仲介者（intermediary）として経済的機会をうまく利用するために必要な知識や価値観をわかりやすく伝達できればよい。漁業に固執するグループ（事例4）にみる経済力の低下は、必ずしも当事者が自らの状態を客観的に評価できないことを示している。昨今、地域住民の開発への参加が強調されるが、こうした仲介者が「内部者」（対象となる人々）であるべきか、「外部者」（政府や NGO などを含め異なる文化的背景をもった者）であるべきかということは本質的な問題でないことは事例から明らかであろう。ただし、エスニック・アイデンティティに関する選択の自由もまた福祉であるとするならば、外部者である場合には自らのもつ権力をわきまえて、

受容の強制はせず、彼らの自律性を引き出せるよう努めなければならない。伝統的に社会組織が緩やかで、強い政治的統合をもたないバジャウのようなケースでは、この点はとくに重要ではないだろうか。

謝 辞

フィールド・ワークの一部は、富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップから研究助成を受けて実施された。研究の枠組み作りと実態調査実施にあたっては、1997年より現在まで客員研究員として所属を許していただいているアテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所から多大な協力を得た。また本稿作成にあたっては、レフェリーによるコメントに多くを負っている。記して深く感謝したい。

参 考 文 献

- Akamine, Jun. 1997. Notes on Sinama Language: Phonology, Orthography, and Wordlist. *The Journal of Sophia Asian Studies* 15.
- 秋道智彌. 1995. 『海洋民族学——海のナチュラリストたち』東京：東京大学出版会.
- 青山和佳. 1997. 「ミンダナオの経済開発とムスリム——ムスリム・コミュニティ調査にむけて」(富士ゼロックス小林節太郎記念基金・小林フェローシップ1996年度研究助成論文).
- Aoyama, Waka. 1998. A Sequel to Badjaw: A Socio-Economic Study on Badjao Migrants in Davao City. Kobayashi Fellowship Annual Report, the FUJI XEROX Kobayashi Setsutarō Memorial Fund.
- Bottignolo, Bruno. 1995. *Celebrations with the Sun: An Overview of Religious Phenomena among the Badjaos*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Cohen, Yehudi A. 1974. *Man in Adaptation*. 2nd ed. Chicago: Aldine Publishing Co.
- Dasgupta, Partha. 1993. *An Inquiry into Well-Being and Destitution*. New York: Oxford University Press.
- Eder, James F. 1982. *Who Shall Succeed?: Agricultural Development and Social Inequality on a Philippine Frontier*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1987. *On the Road to Tribal Extinction: Depopulation, Deculturation, and Adaptive Well-Being among the Batak of the Philippines*. Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press.
- 福島真人. 1998. 「差異の工学——民族の構築学への素描」『東南アジア研究』35(4): 292-307.
- 原洋之介. 1997. 「現代の開発と理想」『いま、なぜ「開発と文化」なのか』(岩波講座 開発と文化 I) 川田順造; 岩井克人; 鴨武彦; 恒川恵市; 原洋之介; 山内昌之 (編), 61-82ページ所収. 東京: 岩波書店.
- Harriss, John; Hunter, Janet; and Lewis, Colin M. 1995. Introduction: Development and Significance of NIE. In *The New Institutional Economics and Third World Development*, edited by John Harriss, Janet Hunter, and Colin M. Lewis, pp. 1-13. New York: Routledge.
- 速水祐次郎. 1995. 『開発経済学』東京：創文社.
- 林 行夫. 1998a. 「序文 (特集 東南アジア大陸部における民族間関係と『地域』の生成)」『東南アジア研究』35(4): 3-13.
- . 1998b. 「『ラオ』の所在」『東南アジア研究』35(4): 78-109.
- International Labour Office (ILO). 1993. United Nations Development Programme TSS1 Mission: Formulation of a Policy and Programme Framework for Participatory Development among Indigenous and Tribal Peoples, 22 February - 2 April 1993.
- 川田順造. 1997. 「いま、なぜ『開発と文化』なのか」『いま、なぜ「開発と文化」なのか』(岩波講座 開発と文化 I) 川田順造; 岩井克人; 鴨武彦; 恒川恵市; 原洋之介; 山内昌之 (編), 1-57ページ所収. 東京: 岩波書店.
- Lapian, Adrian B.; and Nagatsu, Kazufumi. 1996. Research on Bajau Communities: Maritime People in Southeast Asia. *Asian Research Trends: A Humanitarian and Social Science Review* 6: 45-70.

- Lewis, W. Arthur. 1954. Economic Development with Unlimited Supplies of Labour. *Manchester School of Economics and Social Studies* 22 (May): 139-191. Reprinted in *The Economics of Underdevelopment*, edited by A. N. Agarwala and S. P. Singh, pp. 400-449, 1958. London: Oxford University Press.
- Lynch, Frank, S. J. 1959. *Social Class in a Bikol Town*. Research Series, No. 1, Philippine Studies Program, Department of Anthropology, University of Chicago.
- 門田 修. 1997. 『漂海民——月とナマコと珊瑚礁』東京：河出書房.
- 村上泰亮. 1996. 『反古典の政治経済学要綱——来世紀のための覚書』東京：中央公論社.
- 長津一史. 1997. 「海の民サマ人の生活と空間認識——サンゴ礁空間 *t'bba* の位置づけを中心にして」『東南アジア研究』35(2): 261-299.
- 中西 徹. 1991. 『スラムの経済学——フィリピンにおける都市インフォーマル部門』東京：東京大学出版会.
- Nimmo, H. Arlo. 1968. Reflections on Bajau. *Philippine Studies* (Ateneo de Manila University) 16(1): 32-59.
- _____. 1972. *Bajau of the Philippines*. New Heaven: Human Relations Area Files, Inc.
- _____. 1990a. Religious Beliefs of the Tawi-Tawi Bajau. *Philippine Studies* (Ateneo de Manila University) 38: 3-27.
- _____. 1990b. Religious Rituals of the Tawi-Tawi Bajau. *Philippine Studies* (Ateneo de Manila University) 38: 166-198.
- North, Douglass C. 1995. The New Institutional Economics and Third World Development. In *The New Institutional Economics and Third World Development*, edited by John Harriss, Janet Hunter, and Colin M. Lewis, pp. 17-26. New York: Routledge.
- 佐藤 仁. 1997. 「開発援助における生活水準の評価——アマルティア・センの方法とその批判」『アジア研究』43(3): 1-31.
- Sen, Amartya. 1985. *Commodity and Capabilities*. Amsterdam: Elsevier Science Publishers B. V.
- _____. 1988. The Concept of Development. In *Handbook of Development Economics*, edited by H. Chenery and T. N. Srinivasan, Vol. I, pp. 9-26. Amsterdam: Elsevier Science Publishers B. V.
- 清水 展. 1997. 「開発の受容と文化の変化——現代を生きる先住民の居場所」『いま、なぜ「開発と文化」なのか』(岩波講座 開発と文化 I) 川田順造; 岩井克人; 鴨武彦; 恒川恵市; 原洋之介; 山内昌之(編), 153-176ページ所収. 東京：岩波書店.
- Stone, Richard L. 1962. Intergroup Relations among the Taosug, Samal and Badjaw of Sulu. *Philippines Sociological Review*, July-October: 107-133.